新潟大学考古学研究室2002年佐渡調査報告

尾田　識好　川村　崇公　小池　勝典　瀬川　絵里
高橋明公子　武部美恵子　田辺菜緒美　土屋　徹也
長沢　光穂　橋本　博文　矢木　秀典　渡辺　武文

はじめに

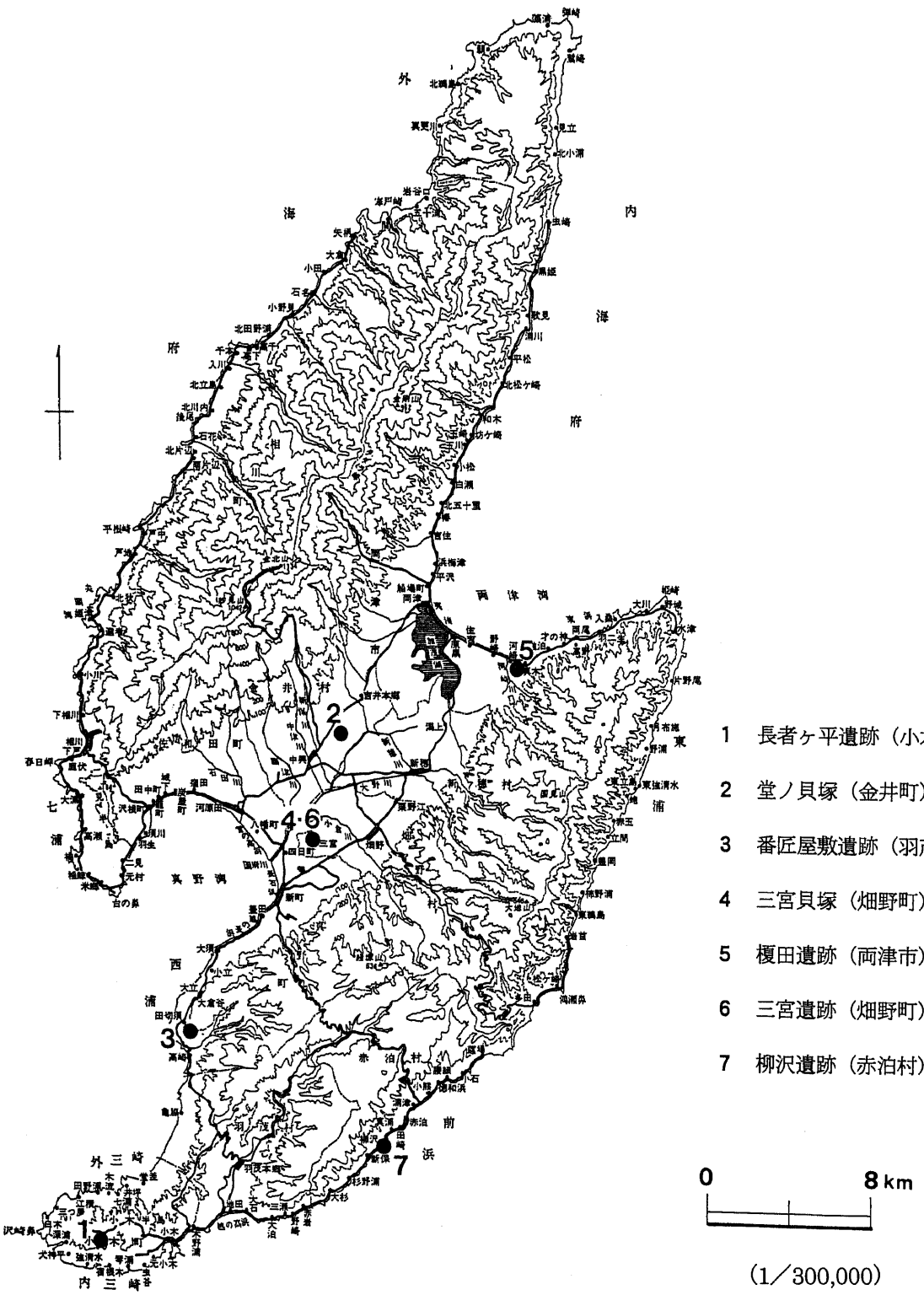
佐渡は絶海の孤島である。本年度は「島嶼の考古学」をテーマに学部・大学院のゼミを行ってきた。海は外からの文化の伝播を阻み、内なる独特の文化を醸成させる。その一方で遠隔地との交易・交流を船を使って可能にさせる。その独自性と共通性を考古資料から探り、佐渡と越後側をはじめとする本州島、その他の地域との交流や佐渡固有の地域的特性を検討してみたい。

このたび、2002年6月29・30日、7月1日および8月9～11日の2回にわたり佐渡の分布調査を実施し、僅かではあるが表面採集資料を得た。また、1999年11月、佐渡へのゼミ旅行の際、両津市平　兵一氏より遺物の寄贈を受けた。小論ではそれらの資料と、過去に新潟大学医学部第一解剖学教室が受け入れた人骨資料に伴い所蔵されていた佐渡関係資料とを、関係者の御高配の下に整理して資料の共有化を図ろうとした。

調査経過

6月29日　新穂村歴史民俗資料館、金井町堂ノ貝塚、佐和田町佐渡博物館、小木町小木考古資料館・長者ヶ平遺跡、相川町台ヶ鼻古墳見学
30日　相川町相川郷土資料館、畑野町三宮貝塚、真野町下国府遺跡、佐和田町佐渡博物館、真野町大須・ケラマキ古墳群・藤塚貝塚見学
7月1日　相川町船窪岩陰遺跡、両津市関公民館前製塩遺跡・せこの浜海蝕洞穴遺跡見学
8月9日　新穂村計良勝範氏宅訪問、真野町佐渡国分寺発掘現場見学、小木町小木考古資料館見学
10日　畑野町三宮玉作遺跡表面採集、新穂村歴史民俗資料館見学、羽茂町番匠屋敷遺跡・赤泊村柳沢製塩遺跡分布調査
11日　畑野町三宮玉作遺跡補足調査、畑野町猿八・両津市赤玉石材調査、両津市榎田遺跡分布調査

（橋本　博文）



第1図　調査遺跡の分布図（九学会 1963）に加筆

1）小木町長者ヶ平遺跡

1．研究略史

遺跡の概要

長者ヶ平遺跡は新潟県佐渡郡小木町大字金子新田126－2番地他に立地する。小木半島のほぼ中央部に位置し、半島を構成する丘陵の最高所部に占地する。標高は174～176mを測り、海岸までの最短距離は1.4km。北西から南東へ下る緩傾斜地で、その両端の比高は4mを測る。現状は畑地となっている。

本遺跡の存在は早くから知られていたが、1965～67年の小木町教育委員会による発掘調査において遺構と多量の遺物が検出され、報告書を出すには至らなかったものの、改めて遺跡の重要性が認識された。

そして1980年より4ヵ年に亘って、小林達雄氏を団長とする長者ヶ平遺跡発掘調査団（以下調査団と略す）による遺跡の確認調査が行われた。全体として、遺構は耕作による湮滅が激しいものの、土器や石器などの遺物量は膨大で多様性に富んでいる。一連の調査により、本遺跡は縄文時代中期中葉を主体とする大規模な集落であることが明らかにされた（長者ヶ平遺跡発掘調査団1981～1984）。

遺構

調査団による発掘調査で、住居址は総数6棟が検出されているが、いずれも楕円形のプランを呈する竪穴住居址である。これらは丘陵最上部の堆積土が最も薄い地帯に設営されているため、耕作による撹乱で保存状態は概して良くない。住居址の規模は、長軸10m、短軸6.4mの大形のものから、直径3m程のものがあり、埋甕や配石をもつ住居址も確認されている。また、住居址とは別の配石遺構も発掘されている。これは径約3.5mの環状にめぐる列石を基本とし、それぞれの列石がさらに連鎖状をなすものと考えられる。袋状土坑を含む多数のピットも検出されている。土器捨て場と考えられる窪地や、時期不明の溝状遺構も発掘されている（長者ヶ平遺跡発掘調査団1981～1984）。

遺物

長者ヶ平ではかなり古くから表面露出の遺物が認識され始めたようで、明治22年発刊の『佐渡誌』巻之15、物産の項には、石鏃・石斧の記事が石鏃を用いた地元の人々の祭祀に関する記述と併せて見出せる。昭和初期から長らく、遺跡の表面採集や試掘が地元の研究者や愛好家などによって盛行したが、記録・整理・保存はなされず、遺物は散逸の一途をたどった（長者ヶ平遺跡発掘調査団1981）。しかし1958年、本間嘉晴氏と椎名仙卓氏により、これらの散逸した遺物の整理が遺跡の踏査とともに行われ、その成果が『南佐渡』において報告され、初めて本遺跡の概要が明らかとなった。その後発掘調査が行われ、膨大な量の遺物が検出されている（小林・青木編1983）。

① 土器

長者ヶ平遺跡発掘調査団により、膨大かつ多彩な土器が検出されている。出土土器は縄文時代の前期末葉から後期初頭までが中心的である。主要なものでは、前期末の十三菩提式期から、中期前葉の集合沈線文系の土器、また島内で「長者ヶ平式」と呼称されてきた新保・新崎式土器、中葉の馬高式を経て、後葉の藤塚式、さらに僅かではあるが三十稲場式も確認されており、本遺跡が非常に長期に亘り連続していたことを物語っている。このような時間的多様さに加え、東北地方北部を中心に分布する円筒土器様式や、東北地方南部を中心とする大木式土器等、離島でありながら他地域の土器もかなり流入していたことが窺える（池田1985、小林・青木編1983）。

② 石器

石器も同調査団によって非常に多く検出されている。時期的には縄文時代中期全般にわたるものが大半である。調査団による発掘では、石器の中で最も多いものは、石皿、磨石、敲石の類で、次いで石槍、石鏃、不定形スクレーパーが多く見られる。古い遺物としては、東北地方の縄文時代早期に普遍的に見られるトランシェ様石器に類似するものが発掘されている。原石は、島内産の黒曜石や鉄石英、玉髄、チャートなども使用されてはいるが、対岸に位置する姫川のヒスイや、和田峠の黒曜石も同じく使用されていることが分かっている（小林・青木編1983、土橋1999）。

この他に、表採資料の中に重要なものが含まれている。1981年に小木町教育委員会に寄贈された本遺跡の表採資料中に、縄文時代草創期に位置づけられる有舌尖頭器が存在し、また草創期以前の遺物として、本遺跡では杉久保型の系統に属すると評価されるナイフ形石器一個が報告されている（本間・椎名1958、小熊・立木1998）。

③ その他の遺物

土偶・土製耳飾等の各種土製品の他、玦状耳飾・ヒスイ大珠・垂飾などの装身具や土器の獣面把手、石棒などがある（小林・青木編1983）。

2．遺物の分析

土器（第2図1～16・第1表1～16）

2002年6月30日の踏査で表面採集された資料のうち、19点を資料化した。土器の観察結果は第1表にまとめた。ここでは、採集した土器を時期別に分類し、その特徴について述べる。

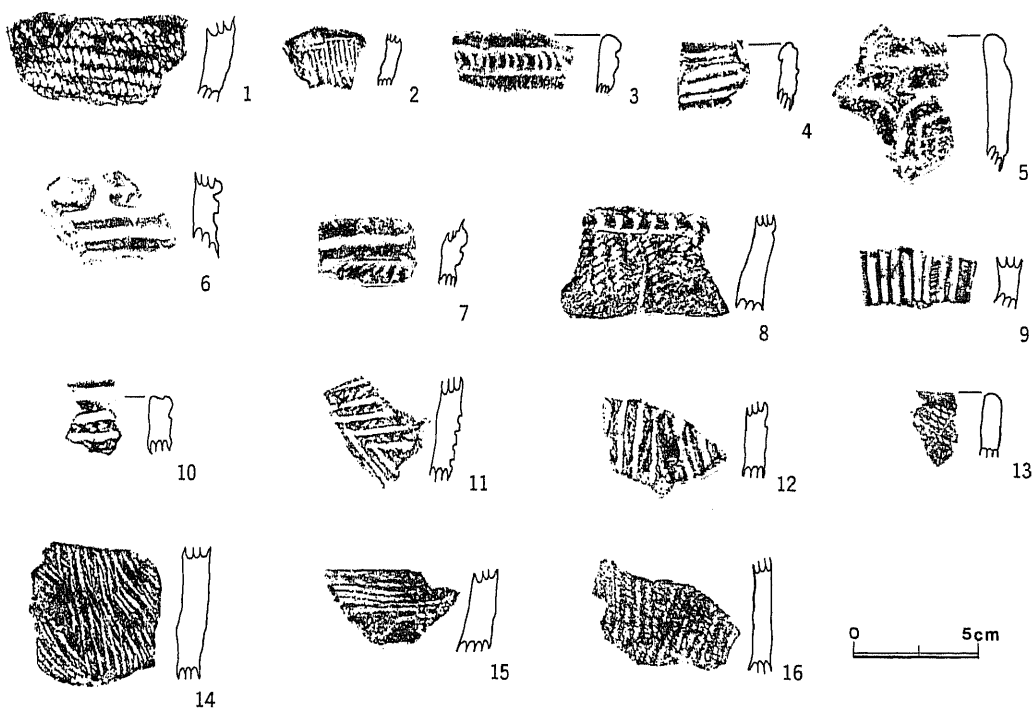
① 中期前葉の土器

今回表面採集した土器の中で最も多い。中期前葉の土器は新保・新崎式に類するものとされ、整理No.3・4・5・6・7・8がこの時期に当たると考えられる。No.3・7・8は、半截竹管による半隆起線文を描きその中に連続爪形文を施すものである。爪形文は人の爪によるものであろう。これらの資料は口縁と平行に数条の沈線を伴い、あるいは縄文を伴っている。No.5は半隆起線によって仕切られた区画内に細かい格子目文を施したもので、新崎式の深鉢の文様と一致する。No.4・10は口縁に数条の沈線が平行することが新保・新崎式に類似するが、口縁部の形状が特徴的である。

第1表　長者ヶ平遺跡土器観察表

遺物No.	器種	外面	内面	胎土 A	B	C	D	E	F	G	焼成	色調外面 色調内面	部位 残存率	口径 底径	残存高 器厚	備考
1		単節LR縄文			△						不良	淡黄 2.5Y8/4 灰白 5Y7/2	胴部		3.5 1	
2		竹管文。ヘラ描き平行細文	ヘラケズリ								良好	灰白 7.5YR8/2 にぶい橙 7.5YR7/3	胴部		2 0.6	
3		半隆起線文。連続爪形文									良好	黄灰 2.5Y4/1 にぶい黄 2.5Y6/3	口縁部	19	2.5 0.8	
4		沈線文			△						良好	にぶい黄橙10YR7/4 にぶい黄橙10YR7/4	口縁部		2.5 0.7	
5	深鉢	半隆起線文。格子目文		△						○	良好	淡黄 2.5Y8/3 淡黄 2.5Y8/3	口縁部		5.5 0.85	
6	深鉢	半隆起線文		○	△		○				普通	灰褐 2.5YR5/2 灰褐 2.5YR5/2	胴部		3.2 1	
7		半隆起線文。連続爪形文			△						良好	浅黄 2.5Y7/3 浅黄橙 7.5YR8/4	口縁部	18	2.5 0.7	
8	深鉢	半隆起線文。連続爪形文。単節RL縄文			△						普通	浅黄 2.5Y7/4 浅黄 2.5Y7/4	胴部		3.9 0.85	
9	深鉢	半隆起線文			○	△	△			○	良好	にぶい橙 5YR6/3 にぶい黄橙10YR7/3	胴部		2.1 0.8	
10		沈線文			△						良好	浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 7.5YR7/6	口縁部		2.5 0.8	
11	深鉢	平行沈線文。撚糸圧痕文			○						普通	にぶい黄 2.5Y6/4 にぶい黄橙 5YR5/3	胴部		2.9 0.9	
12	深鉢	平行沈線文		△	○						不良	灰褐 5YR5/2 灰褐 5YR5/2	胴部		0.85 1	
13	深鉢	撚糸文			○	△	△	△			良好	浅黄 2.5Y7/4 浅黄 2.5Y7/4	口縁部		2.6 0.85	
14	深鉢	撚糸文					○				不良	にぶい橙 7.5YR7/4 黄灰 2.5YR6/2	胴部		5.4 1	
15		撚糸文		○			○				不良	暗赤灰 2.5YR3/1 にぶい黄橙10YR7/2	胴部		4.5 1.1	
16	深鉢	R無節縄文		○	○	○	△			△	普通	灰白 10YR8/1 灰白 7.5YR8/1	胴部		3.8 0.85	

胎土凡例　A 石英，B 長石，C 輝石，D 角閃石，E チャート，F 褐鉄鉱，G 黒雲母　　(単位はcm)



第2図　長者ヶ平遺跡土器実測図

② 中期中葉の土器

No.9がこの時期に当たると考えられる。いずれも馬高式で、器面を粘土紐による隆帯文で埋める王冠形土器ではないかと推測される。

③ 中期後葉の土器

No.11・12がこの時期に当たると考えられる。いずれも佐渡独自に発達した様式とされている藤塚式に分類される。No.11は器面全体に矩形（逆三角形をモチーフにした）の沈線を施した土器と考えられる。沈線を描くのに先行して、撚糸文を施している。No.6もNo.3と類似する平行沈線が描かれているが、さらに沈線の間に撚糸圧痕文が施されている。

④ その他

No.1は単節LR縄文が全体に施されており、前期段階の土器と推測される。No.2は器厚が約6㎜と薄い。竹管による平行線が描かれており、中期初頭の土器と考えられる。No.13は口縁に至るまで撚糸文が施されている。No.14・15は撚糸文だが、No.14は撚糸文が複雑に交差しており、No.14は原体を強く押し付けている。No.16は珍しい無節縄文が施されている。

石器（第3図1～16・第4図17～28・第2表1～28）

2002年の踏査で、石器・石核・フレーク等が多数採集されたが、このうち14点を資料化した。また、本学旭町学術資料展示室所蔵の石器や未製品18点についても資料化した。

① 石鏃

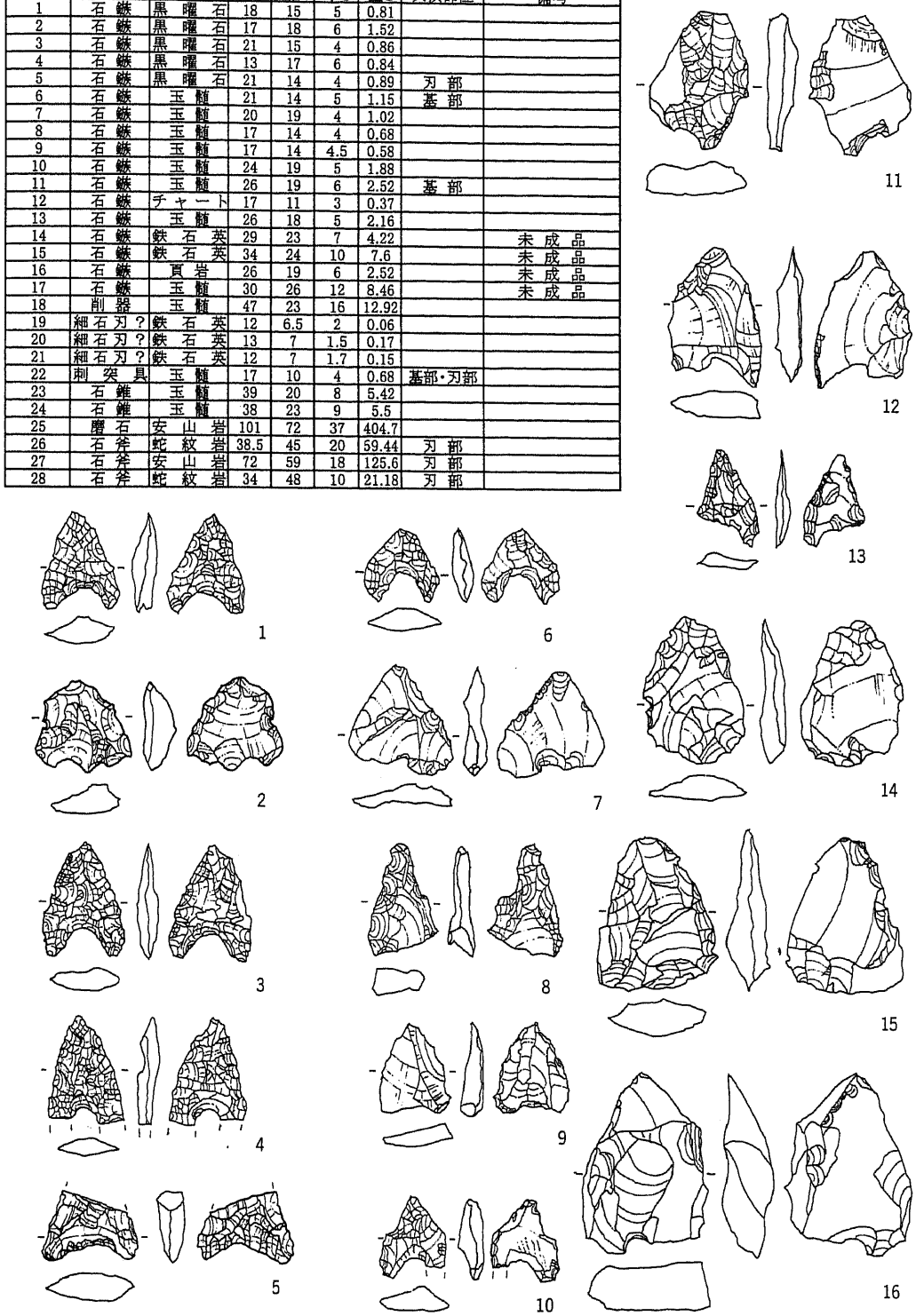
17点表面採集された。全長20㎜前後の比較的小型なものが多い。石材は、玉髄製47%・黒曜石製29%・鉄石英12%、頁岩、チャートが各6%の割合になっている。No.4・18・11・13は基部が、No.5は刃部が欠損している。基部が大きく欠損しているNo.18以外は、基部が凹形に加工されているのがわかる。No.11の基部に柄が見られる他は、すべて無柄である。主要な石材は黒曜石と玉髄であるが、この2材によって、調整の形態は全く異なっている。黒曜石製の石鏃は、ほとんどが細な調整を施され、概ねシンメトリックに整形されている。これに対し玉髄製は剝離面が広く、比較的粗い整形となっていることがわかる。No.7・9・11・12をみると、片面は粗剝離面をほぼそのまま使い、もう片面を僅かな調整で巧みに石鏃の形に整形していることが窺える。複数採集されたのはこの2材だけであったが、各々の素材に適合した調整をしていたことが窺える。

またNo.14～17は、粗割りされた素材を加工するにあたり、石鏃としての機能を有するに至らない段階で加工が終了したもの、いわゆる「未製品」として分類した。しかし、未製品と処理される石器の中には、製作途中の失敗で完成が不可能となった、所謂「失敗品」が相当数存在するとの阿部朝衛氏の指摘がある（阿部2001）。ここでは阿部氏の指摘をもとに、No.14～17の「未製品」資料について若干の検討を試みる。阿部氏は「未成品」を抽出するにあたり、石鏃と矢柄との接着材であるアスファルトが、基部に付着しているか否かを主要な基準とした。しかし、今回扱う石鏃に、明確なアスファルトの付

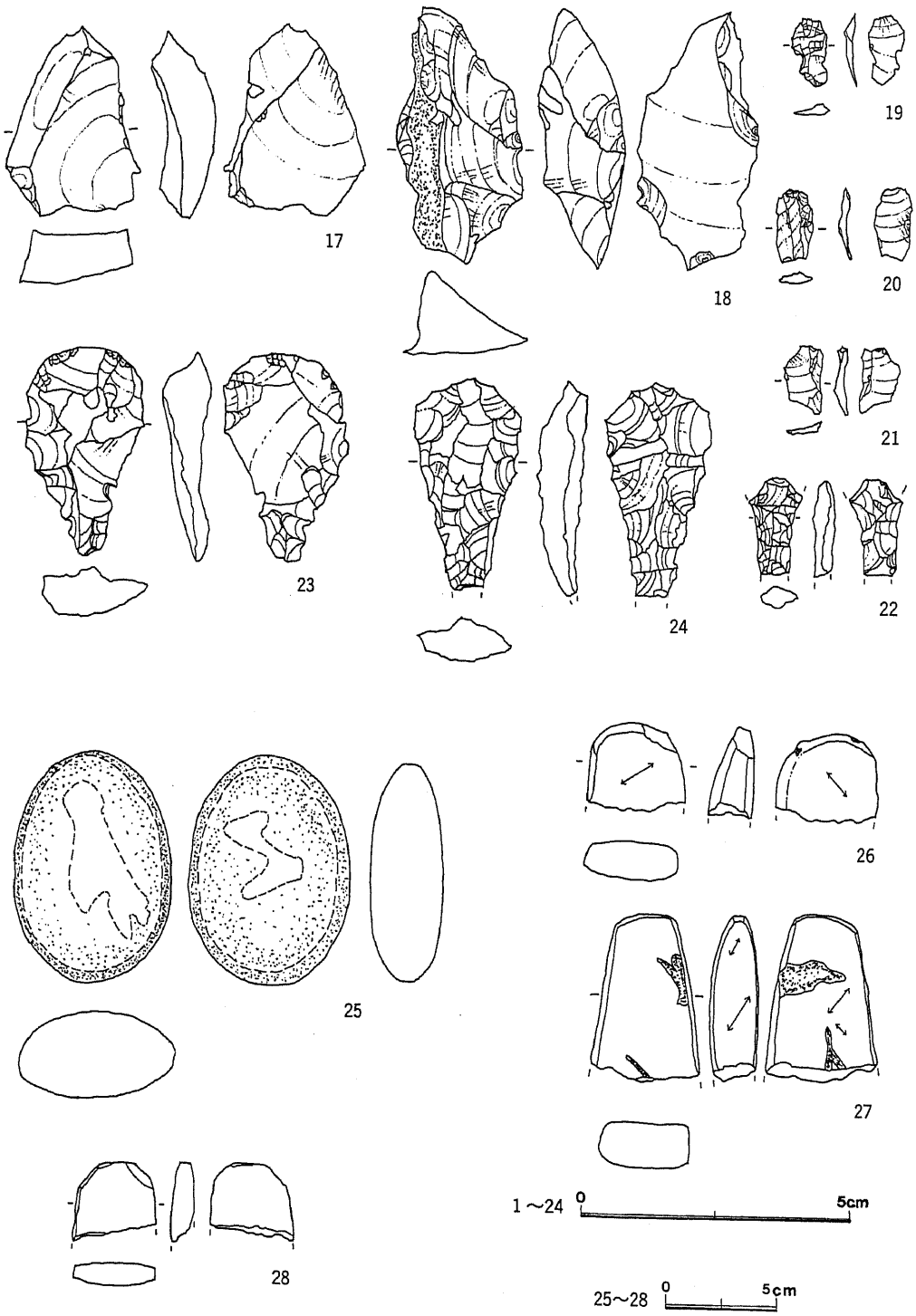
第２表　長者ヶ平遺跡石器観察表

長さはmm　重さはg

遺物No.	種別	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	欠損部位	備考
1	石鏃	黒曜石	18	15	5	0.81		
2	石鏃	黒曜石	17	18	6	1.52		
3	石鏃	黒曜石	21	15	4	0.86		
4	石鏃	黒曜石	13	17	6	0.84		
5	石鏃	黒曜石	21	14	4	0.89	刃部	
6	石鏃	玉髄	21	14	5	1.15	基部	
7	石鏃	玉髄	20	19	4	1.02		
8	石鏃	玉髄	17	14	4	0.68		
9	石鏃	玉髄	17	14	4.5	0.58		
10	石鏃	玉髄	24	19	5	1.88		
11	石鏃	玉髄	26	19	6	2.52	基部	
12	石鏃	チャート	17	11	3	0.37		
13	石鏃	玉髄	26	18	5	2.16		
14	石鏃	鉄石英	29	23	7	4.22		未成品
15	石鏃	鉄石英	34	24	10	7.6		未成品
16	石鏃	頁岩	26	19	6	2.52		未成品
17	石鏃	玉髄	30	26	12	8.46		未成品
18	削器	玉髄	47	23	16	12.92		
19	細石刃？	鉄石英	12	6.5	2	0.06		
20	細石刃？	鉄石英	13	7	1.5	0.17		
21	細石刃？	鉄石英	12	7	1.7	0.15		
22	刺突具	玉髄	17	10	4	0.68	基部・刃部	
23	石錐	玉髄	39	20	8	5.42		
24	石錐	玉髄	38	23	9	5.5		
25	磨石	安山岩	101	72	37	404.7		
26	石斧	蛇紋岩	38.5	45	20	59.44	刃部	
27	石斧	安山岩	72	59	18	125.6	刃部	
28	石斧	蛇紋岩	34	48	10	21.18	刃部	



第３図　長者ヶ平遺跡石器実測図１



第4図　長者ヶ平遺跡石器実測図2

着は見られなかったため、基準が不明確であるという誹りを免れ得ないが、資料の厚さ・重量が大きく、明らかに石鏃としての機能を有しないものを抽出した次第である。

No.14は、片面に広い凹みがあり、これは粗剝離の段階で生じたものと考えられる。その後刃部の調整は行われたが、基部を凹形に加工する段階において中途で調整を放棄した痕跡が認められる。粗剝離段階での失敗により片面が変形し、それが石鏃の機能に無視できない欠陥をもたらすと製作者が判断して製作が中断されたのであれば、これは失敗品と評価することができよう。

No.14・15は鉄石英を石材としている。切っ先と基部とを結んだ中軸線からみると、一方の刃部の加工は成功し通常の鋭さを得ているが、もう一方の刃部はかなり切り立っており、調整で鋭さを得るのは難しいと思われる。それ以上に基部の厚みが大きすぎ、厚みを減らし、且つ凹基に調整するのは不可能であろう。完成品になる余地は無く、失敗品と言わざるを得ない。

No.16は全ての刃部になるべき辺が大きく切り立っている。粗剝離段階の失敗品と評価できる。

No.17は、形状から石鏃製作のために粗剝離されたと考えられるが、剝離の際に大きく全体が湾曲してしまっている。これでは石鏃の素材にはならないため、何の調整も施されずに廃棄されたと考えられる。

以上の結果、あさひまち展示館所蔵の石鏃「未製品」はいずれも失敗品であって、完成品に加工されるべき素材ではなかったと考えられる。

② 磨石

1点採集されている（No.25）。安山岩を石材とし、両面に磨痕がある。

③ 磨製石斧

3点採集されたが、いずれも擦切痕は不明瞭である。これらは、両側縁が刃部に向かって広がり、側縁が直線的であるという点で共通している。

④ その他

石錐の破損品と思われる石器が1点（No.22）拾われている。縄文時代後期に見られる有柄石鏃の破損品の可能性もある。

また、細石刃の形態をもつ剝片が3点採集された(19～21)。いずれも鉄石英を石材としている。剝離面が完全にある程度平行だが、微細剝離の剝片である可能性も捨てきれない。鉄石英を用いた細石刃は、鹿児島県知覧町登立遺跡に類例がある。だが、佐渡島内においては細石刃の確かな出土例はない。

3．小　結

長者ヶ平遺跡は、すでに調査団によって4次にわたる発掘調査が行われ、その概略は研究史で述べた。同調査団によって発掘された遺物量は膨大であり、今回の調査で確認された少数の遺物群は、ほとんどがその中に包含される。ただ、細石刃に類似する石器については、佐渡では確実な出土例がない旧石器時代の遺物である可能性がある。また、調査団

の報告では触れられていない「未製品」の分析も、分析対象の資料の絶対数が不十分ではあるが、僅かながら足がかりを摑めたかと思う。本遺跡では戦前から表面採集や非学術的な発掘による資料散逸という問題が付きまとっていたが、ここに本学の表面採集資料公表の機会が与えられ、あさひまち展示館の展示と並び、一定の意義を見出すことが出来よう。

（川村崇公）

2）金井町堂ノ貝塚

はじめに

新潟大学考古学研究室では2002年6月29日に、金井町堂ノ貝塚において表面採集を行った。ここでは、その際に採集された資料について報告を行う。また、1969年に発掘され、新潟大学医学部に保管されていた堂ノ貝塚第4号人骨に伴って出土した土器についても分析を行い、さらに発掘後に刊行された報告書（金井町教育委員会・佐渡考古歴史学会1977）に記載されている資料との比較・検討を行う。

1．研究略史

堂ノ貝塚は佐渡郡金井町大字貝塚474番地を中心に所在し、国仲平野の大佐渡山地よりにならぶ標高約16mの舌状台地の先端に位置している。古くから貝層が露出し、縄文時代中期のサドシジミを主体とする主淡貝塚として研究者に知られ、また大字名の起源ともなった著名な遺跡である。明治の中頃より、一部研究者による小試掘が試みられ、1920（大正9）年に鳥居龍蔵が三宮貝塚を訪れた際には、貝塚が「此の付近、地名の貝塚と云う所にもあります」（鳥居1926）と堂ノ貝塚について触れているなど、古くからその存在が研究者に知られていた。1937（昭和12）年には斎藤秀平により「大字貝塚　海抜百米以下、洪積層の地で、縄紋土器及び石器を出す。」と紹介されている（斎藤1937）。

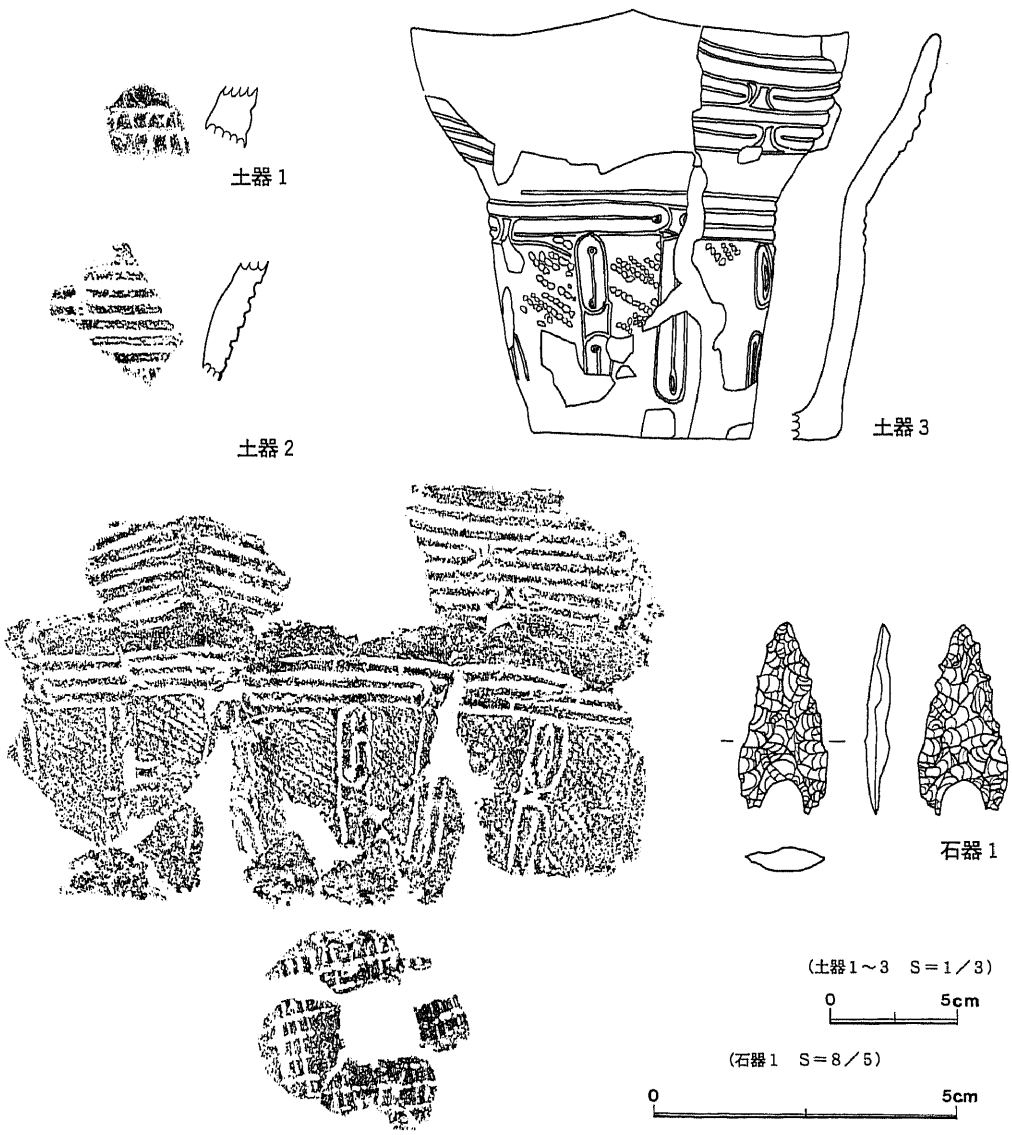
1958（昭和33）年には本間嘉晴・椎名仙卓が出土資料の編年研究を行っている（本間・椎名1958）。本間・椎名両氏は、堂ノ貝塚を周辺の貝塚から後期主体の貝塚とし、資料には一部中期初頭、前期末葉に遡るものも混在しているとする。また、資料の中には関東地方における下小野式[1]に類似するものが存在するとしている。

1969（昭和44）年には金井町教育委員会による発掘調査が実施され、同年には調査の概要が報告されており（金井町教育委員会1969）、馬高、藤塚両式が見られることから縄文時代中期全時期の遺跡とし、その中心は馬高式の終わりから、加曾利E式の中頃としている。発掘調査の詳細については1977（昭和52）年に報告されている（金井町教育委員会・佐渡考古歴史学会1977）。土器の年代としては、Ⅰ～Ⅲ期の区分を想定し、第Ⅰ期が中期前葉、第Ⅱ期が続く第Ⅲ期の前段、第Ⅲ期が馬高以前の中期前葉とし、その中心は第Ⅰ期の中期前葉としている。土器以外の出土遺物としては、無柄石鏃・石槍・石錐・縦形石匙・打製石斧・磨製石斧・敲石・凹石などの石器類と銛・尖頭器・鹿角製板状有孔垂飾・円盤状有孔垂飾・「海獣」歯牙製三孔垂飾[2]などの骨角器が出土している。遺構としては、墓坑、土坑、立石状の遺構が確認され、また墓坑などからは屈葬状態の埋葬人骨及び幼児骨が計8

第3表　堂ノ貝塚土器観察表

遺物No.	器種	外面	内面	胎土 A	B	C	D	E	F	G	H	焼成	色調外面 色調内面	部位 残存率	口径 底径	残存高 器厚	備考
1	深鉢？	横位の半隆起線文上に爪形文	—	△	◎		△					良好	にぶい黄橙 10YR7/4 明黄褐 10YR7/6	口縁部？ —	—		—
2	深鉢	横位の沈線文	—		◎	△						普通	にぶい黄橙 10YR7/4 黒褐色 10YR3/1	口縁部 —	—	5.3 1.2	—
3	深鉢	口縁部に突帯。口縁部・頸部に横位の半隆起線文。胴部にRL縄文。縦位の沈線文。底部に籠状圧痕	—		◎	○			○			不良	橙 7.5YR7/6 にぶい黄橙 10YR6/4	口～底 3/4周	16.6 8.7	16.2 1	口縁部付近の内面に煤が付着

胎土凡例　A 石英，B 長石，C輝石，D 角閃石，E チャート，F 褐鉄鉱，G 黒雲母，H 海綿骨針　　（各単位はcm）



第5図　堂ノ貝塚表面採集遺物及び発掘出土遺物実測図

体分検出されている。

2．遺物の分析（第5図）

表面採集の結果、土器片2点、石器1点、その他小石核・剝片類27点を採集した。このうち資料化が可能である石器1点について分析を行った。また、1969年の発掘において第4号人骨と伴って出土した土器片については、底部片6点、胴部片10点、口縁部片2点、その他部位不明の細片5点の整理を行った。このうち底部片4点、胴部片4点、口縁部片1点、細片2点が接合でき、同一個体と認められた。分析を行ったものは、前述の接合できた資料と他2点である。これらのうち、まず土器の分析から述べていくこととする。

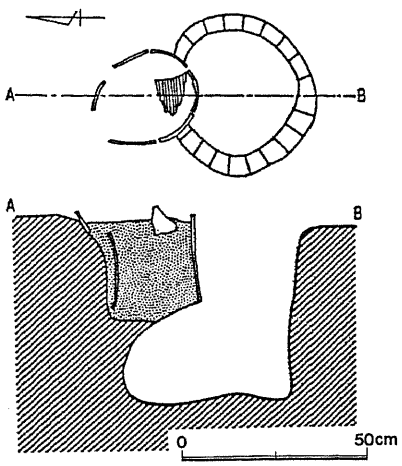
1は深鉢の胴部片と見られる。2条の半截竹管による横位の半隆起線文上に同じく半截竹管で爪型文を施す。半隆起線文を施す際の両側の沈線が連続しており、半截竹管による押引き文ではないことが分かる。小破片のため詳細に述べることはできないが、本遺跡の発掘報告書（金井町教育委員会・佐渡考古歴史学会1977）に類例が見られ、縄文時代中期前葉とされている。また、長者ヶ平遺跡の報告書（小木町教育委員会1981）に類例が紹介されており、縄文中期前葉の新保・新崎式の土器に比定できる。

次の2、3は文様及びその施文位置や施文具が類似している。2は深鉢口縁部片である。やや外湾し、外面には半截竹管による横位の半隆起線文が6条施されている。施文の方向は不明である。半隆起線の断面はやや角張った様子となっている。3は深鉢である。口縁部は波状を呈し、文様は7条の半截竹管による横位の半隆起線文を施す。この半隆起線文は下部の4条において一部で2条単位の工字文を表す。頸部にも半截竹管による横位の半隆起線文が3条施される。これも下部2条を単位とした工字文を一部で表す。頸部の半隆起線文は一連のものではなく、上下一段ずつが途中で入れ替わっている。胴部の文様はRL縄文を地文とし、半截竹管による半隆起線文を用いて、縦位の文様を表す。この文様は現状で6単位分が見られ、復元すると胴部は、この縦位の半隆起線文による文様で8つの単位に分けることができる。この文様は半截竹管を用いて一筆書きに2条の半隆起線文を描くものであるが、その形状には二重の長楕円を上下に2つ並べて配置するものや、楕円形の中に1条の沈線が入るように見えるもの、長五角形の中に1条の沈線を引くように見えるものなど1単位ごとの表現に差異が見られる。底部には網代痕が見られる。内面では、口縁部付近にのみ煤の付着が見られる。

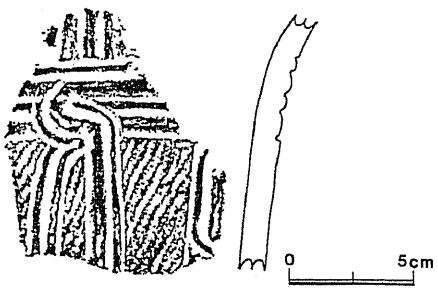
3は、外面が上下2段の文様構成に分かれ、縄文を主に地文とし、なおかつ半隆起線文の断面形がカマボコ状を呈することから、北陸地方縄文時代中期前葉の新保・新崎式土器型式に比定できる。またこのことは、「新保新崎式土器様式の多くは網代痕をとどめている」（小林1983）という記述にも矛盾しない。また2は3と半隆起線の断面形状は異なるものの、施文具、施文の位置ともに3に類似しており、3と同時期、同型式のものと考えられる。

次いで石器の分析を行う。1は無茎の石鏃である。全体形はほぼ左右対称で、二等辺三角形状となっており、刃線は直線で、一部で鋸歯状を呈する。抉りは「凹」の字を逆にし

た形の半楕円形を呈している。また、両面ともに細かい剝離を行っている。



第6図　第4号人骨



第7図　第4号人骨共伴土器

3．小　結

(1)　4号人骨共伴土器について

土器1～3は前述のように第4号人骨と共に出土したとされる1969年の発掘資料である。1977年に刊行された発掘報告書によれば、第4号人骨は長靴状の土坑の中から小臼歯1個と体肢骨の小破片が出土したもので、その長靴状の土坑付近からは深鉢が1点上下逆の向きで発掘されたという（金井町教育委員会・佐渡考古歴史学会1977）。報告書の文章の記載によれば、深鉢1点のみが出土したように受け取ることができるが、同じ報告書にある第13図では、深鉢状の土器と破片が1点記載されているようである（第6図）[3]。また第20図1では破片のみの拓本と断面実測図が掲載されている（第7図）[4]。こうしたことから、第4号人骨に共伴する土器は2個体と考えられ、このうち1個体は今回分析を行った3の深鉢であると考えられる。しかし報告書記載の第13図と比較すると、深鉢3の口径、器高はそれぞれ16.6cm、16.2cmであるのに対し、報告書の図から読み取れる口径、器高はそれぞれ30cm、24cmであり、一致しない。これに関しては報告書記載の実測図がどれだけ正確であるかということも考えられるため、報告書記載のものと、今回分析を行ったものが同一個体であるかどうかを判断することは難しい。またほかに報告書に記載のない第4号人骨と共伴の土器が存在している。こうしたことから、今回分析を行ったものについては、報告書の記載がなく、現状においては実際の出土位置を知り得ないため、正確には出土位置不明とすべきものである。しかし、今回は医学部に所蔵された際の注記を重視し、第4号人骨共伴資料として扱っている。

(2)　遺物の分析による遺跡の概要について

前項において、採集資料および1969年の発掘資料の分析をするとともに、遺物の年代の考察を行い、資料が縄文中期前葉のものであるとすることができた。これは1969年に行わ

第4表　堂ノ貝塚石器観察表

遺物No.	種別	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	欠損部位	備考
1	石鏃	鉄石英	3.1	1.4	0.4	1.4	－	凹茎無茎鏃

れた発掘の報告書で報告された遺跡の年代と一致している。このことから、堂ノ貝塚が縄文中期前葉の遺跡であるという確証を与えられた。しかし今回、分析を行うことのできた資料の点数が限られたため、他時期の遺物が見られず、遺跡がどの程度の年代幅を持って成立したかについて知ることはできなかった。今後、他の出土遺物を含んだ成立時期の再検討がなされることを期待する。（矢木秀典）

3）羽茂町番匠屋敷遺跡

はじめに

新潟大学考古学研究室では2002年の6月と8月に佐渡島内の遺跡で表面採集調査をおこなった。その際、羽茂町の番匠屋敷遺跡では土器片20点、石器12点、剥片62点が採集できた。ここでは、当遺跡のこれからの調査の方向性を示すため、資料化した土器片10点、石器12点について報告し、若干の考察をおこなったものを紹介する。

1．遺跡の概要

遺跡は羽茂町村山字垣ノ内にある。台地上の畑地で、標高は130mである。台地の西側前方は沢が入り込み、後方には荒磯山が迫っている。小村小学校前から亀道への道を250mほど下ったところの島倉久男（番匠屋敷）家の畑地を中心に広がる遺跡である。その西側の島倉寛（柿ノ木平）家の畑地、道をはさんで南側およそ100mのところにある笠井アサヨ（南）家の畑地、小村小学校の方へ約100m引き返したところの岡崎一夫（治郎平）家の畑地、番匠屋敷遺跡から約200m離れた北側台地の佐々木茂美（陣馬ヶ平）の畑地が存在し、これらをすべてふくめて番匠屋敷遺跡とされている。

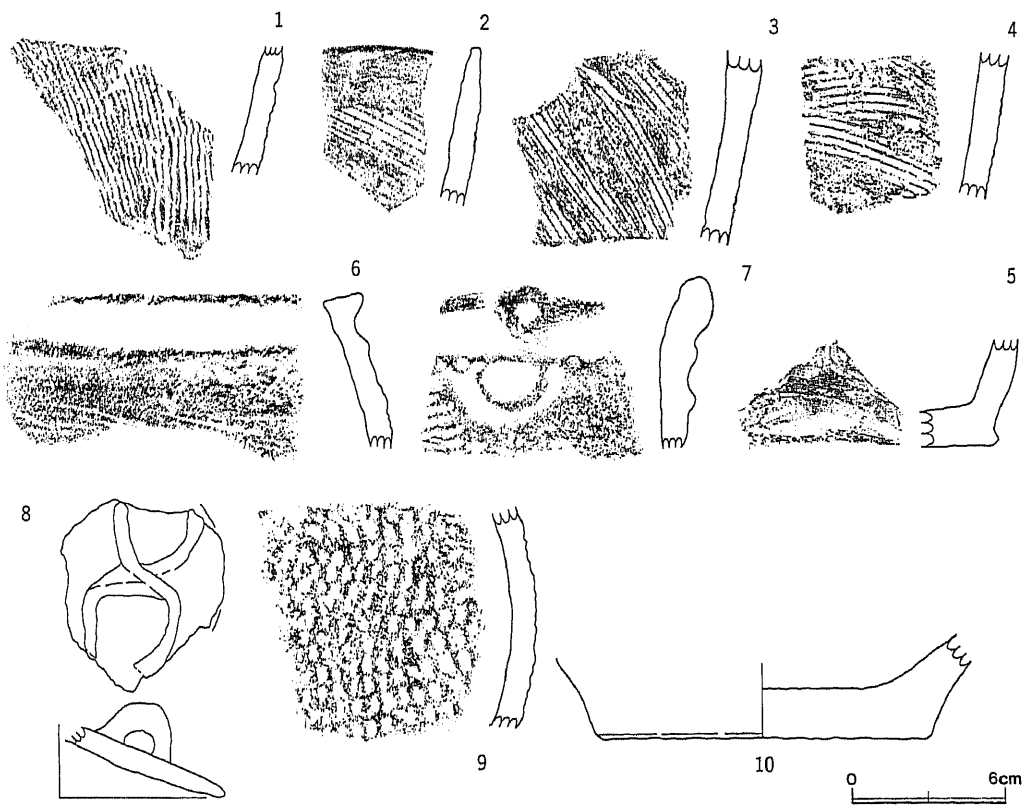
2．研究略史

遺跡の発掘調査は行われておらず、遺物はすべて表面採集によるものである（羽茂町1989）。縄文時代の遺物としては、番匠屋敷および柿ノ木平の畑地から石鏃、石斧、凹石、石匙、石錘、石皿、石棒などの石器、撚糸文、貝殻条痕文、刺突文などの土器片がみられる。南家の畑地からは土器は発見されておらず、石鏃や石斧などの石器がみつかっている。これらの遺物から、この遺跡は縄文時代中期後半から後期初頭のものと考えられる。また番匠屋敷と柿の木平の畑地から発見されている石鏃は無柄石鏃であるのに対し、南家から発見されている石鏃は有柄石鏃であり、時期の違いが指摘されている。弥生時代の遺物としては南家の畑地からアメリカ式石鏃が発見されており、弥生時代後期後半の存在をうかがわせる。また陣馬ヶ平家の畑地からは、同じように弥生時代後期後半のものとみられるガラス小玉1点が発見されている。

第5表　番匠屋敷遺跡土器観察表

遺物No.	器種	外面	内面	胎土 A	B	C	D	E	F	G	H	焼成	色調外面 色調内面	部位 残存率	口径 底径	残存高 器厚	備考
1	鉢	撚糸文(縦)			◎							普通	灰白 2.5YR8/2 灰白 2.5YR8/2	胴部		5.2 1.2	
2	深鉢	貝殻条痕文 (左上～右下)	貝殻条痕文 のあとにナデ		◎	△						普通	灰白 10YR8/2 灰白 10YR8/2	口縁部		6.4 1.1	殻頂部によるみがき
3	深鉢	貝殻条痕文 (左上～右下)	ハケ		◎	△						良好	灰白 10YR8/2 灰白 10YR8/2	胴部		7.8 1.4	
4	深鉢	貝殻条痕文		◎	○	○						不良	明褐色 10R4/4 にぶい橙 7.5YR7/3	胴部		6.3 1.1	
5	深鉢？	貝殻条痕文	ハケ		◎					△		普通	明黄褐 10YR7/6 淡黄 2.5YR8/3	底部		4.1 1.2	
6	深鉢	隆起線文・貝 殻条痕文		◎	△					△		普通	橙 2.5YR7/8 橙 2.5YR7/6	口縁部 1/9周	34.6	6.4 1.6	有孔鍔付土器
7	深鉢？	隆起線文・無 節LR縄文		◎		○						良好	橙 2.5YR6/6 橙 5YR7/8	口縁部		7 1.5	橋状把手
8	蓋			△	◎							良好	明赤褐 2.5YR5/6 明赤褐 2.5YR5/6	口縁部		6.5 2.7	
9	鉢	刺突文(花弁 形)		△	◎	△						良好	灰白 7.5YR8/2 灰白 7.5YR8/2	胴部		9.6 1.1	
10	深鉢		ハケ		◎	○						良好	にぶい橙 5YR7/4 にぶい橙 5YR7/4	底部 2/3周	12.8	3.2 2.3	

胎土凡例　A 石英，B 長石，C 輝石，D 角閃石，E チャート，F 褐鉄鉱，G 黒雲母，H 海綿骨針



第8図　番匠屋敷遺跡土器実測図

3．遺物の分析

土器片（第8図）

・縄文時代中期（2～6）

2の口縁の下約2cmにわたって外面と内面の両方は、殻頂部でみがかれている。3の内面の下端部には粘土紐のつなぎがみられる。4の上部にはやや右下がりの貝殻条痕文が施され、それを一部切るようにして右下がりの貝殻条痕文が施されている。6は有孔鍔付土器である。

・縄文時代後期（1、7～9）

7は橋状把手であるが、橋状の貫通孔がなくなったもので、貼付状の把手である。口縁の下約2.5cmには貼付による1条の隆起線文が施され、さらに環状の隆起線文が貼り付けられている。その後にそれらに刺突文が施されている。8はややねじれのある橋状把手である。

石器（第9図）

・石鏃（1、2）

2点みつかっている。1は凹基の石鏃で、矢柄の部分が折損している。2は平基三角形石鏃だが、製作途中の未成品と考えられる。

・掻器（3、4）

2点を掻器として分類した。2点とも破損品である。3は薄手のもので、右側縁に刃部をつくりだすための二次調整がほどこされている。4は円形をしており、右側縁に刃部をつくりだしている。

・石錐（5、6）

完形品が2点みつかっている。

・抉入石器（7）

1点を抉入石器と分類した。完形品である。右側縁の中央部に抉りを入れている。左側面に原礫面がみられる。

・石核（8）

1点みつかっている。Ⅰ面には縦長剥片を3～4つ剥離した痕跡がみられる。打面は横からの剥離で作出されている。両側縁に形を整えるための調整がみられる。打面と剥離作業面の接線にリップをもっている。Ⅱ面にはヒンジ・フラクチャーがみられる。

・磨石（9）

Ⅰ面に磨痕がみられる。Ⅰ面の下方とⅡ面の上方に敲打痕がみられる。磨石として使用した後、叩石として使用したものと考えられる。Ⅱ面の下方が大きく割れて折損している。

・磨石（10）

上面、下面、右側面に磨痕がみられる。Ⅰ面、Ⅱ面、上面には敲打痕もみられる。9と同様、磨石として使用した後、叩石として使用したと考えられる。

・凹石（11）

中央部上方に3つのくぼみがみられる。

・剥片

62点みつかっている。石材は玉髄、鉄石英、珪質頁岩、頁岩、黒曜石である。石材不明が4点ある。剥片の大きさはさまざまである。原礫面の残っているものも数点ある。二次調整のある剥片もある。

4．小　結

縄文時代中期の貝殻条痕文土器（2～5）は、佐渡の縄文時代中期から後期にかけてみられる貝殻条痕文土器系に属するものであると考えられる。有効鍔付土器（6）は中部山岳地方の影響がみられる。縄文時代後期の土器（7～9）は三十稲場様式である。この3点は小型で装飾性の高い精製土器である。

次に石器についてであるが、ここでは礫塊石器（第9図9～11）を除いた石器と剥片の石材の構成について分析をおこなった。

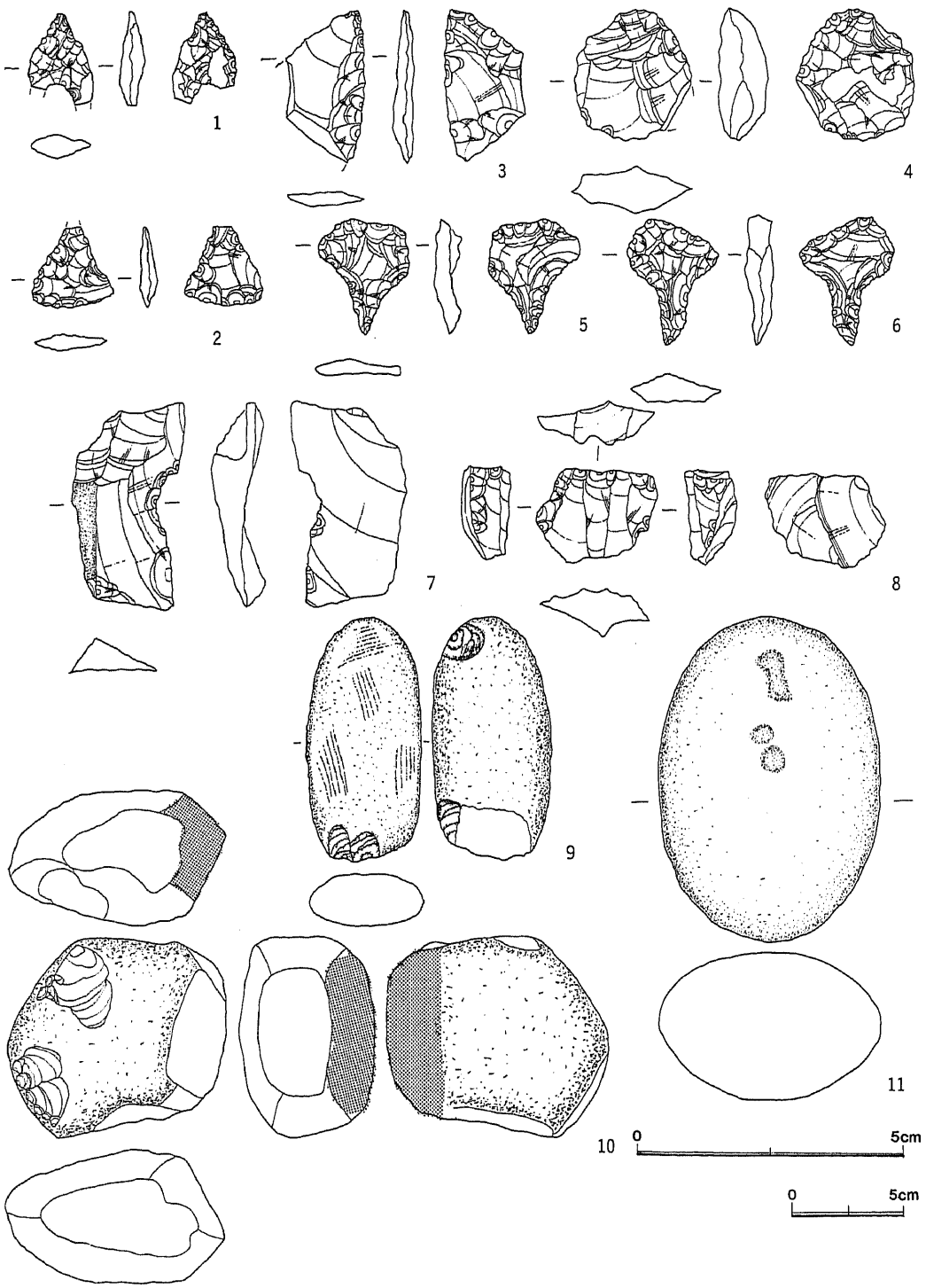
第7表には石材別形態別の点数と重量を示した。点数についてみてみると、石材が玉髄のものは石器で4点、剥片で42点みつかっておりもっとも多い。ついで石材が鉄石英ものは、石器は発見されていないが剥片が11点確認されている。石材が珪質頁岩のものは石器で3点、剥片で3点認められる。石材が黒曜石のものは石器で1点、剥片で1点存在する。石材が頁岩のものは剥片で1点見いだされる。重量についてみてみると、玉髄が294.7gでもっとも多い。ついで鉄石英の100.9g、珪質頁岩の19.7g、頁岩の9.1g、黒曜石の5.5gとつづく。

第8表には石材の割合を示した。点数では玉髄が65.7％と圧倒的に多い。ついで鉄石英が22.6％、珪質頁岩が8.6％とつづく。重量でも玉髄が66.1％と多く、ついで鉄石英の22.6％、珪質頁岩の4.4％とつづく。

このように玉髄が点数、重量において他の石材より圧倒的に多いことがわかる。3分の2以上を玉髄が占めている。また礫塊石器の中に石材が玉髄のものもあり、玉髄の原石が手に入りやすかったことを示している。よって番匠屋敷遺跡では主な石材に玉髄が使用されていたと推測できる。玉髄の原産地は現在のところまだ不明であるが、長者ヶ平遺跡でも大量に使用されているので佐渡島に原産地があったと思われる。鉄石英と珪質頁岩についてであるが、点数、重量ともに鉄石英が玉髄についで高い割合を示しているが、すべて剥片であり石器は含まれていない。一方、珪質頁岩は鉄石英より点数と重量の割合は低くなっているが、石器が3点みつかっている。現時点ではどちらがより多く使用されていたか述べることはできないが、どちらも主石材である玉髄を補う存在であったと考えられる。

おわりに

これまで表面採集資料の土器片と石器から断片的ではあるが番匠屋敷遺跡を概観してきた。大枠ではこれまで理解されてきた新潟県の縄文時代の範疇でとらえられるものである



第9図　番匠屋敷遺跡石器実測図

第6表　番匠屋敷遺跡石器観察表

遺物No.	種別	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	欠損部位	備考
1	石鏃	玉随	1.8	1.2	0.5	0.6	矢柄	凹基
2	石鏃	玉随	1.5	1.6	0.4	0.6	刃部	未製品
3	掻器	珪質頁岩	2.9	1.5	0.4	1.6	下半部	
4	掻器	黒曜石	2.5	2.3	1	4.4	右下刃部	円形
5	石錐	珪質頁岩	2.2	1.8	0.3	1.2		
6	石錐	玉髄	2.4	1.8	0.6	1.5		
7	抉入石器	玉髄	3.9	2.3	0.6	5.2		
8	石核	珪質頁岩	1.8	2.3	0.9	3.5		残核
9	叩石＋磨石	凝灰岩	7.9	6	3.4	187		複合石器
10	叩石	玉髄	9	10.2	5.9	721.6		
11	凹石	安山岩	14.5	10	6.5	1401.6		

第7表　石材別形態別の点数と重量

	石鏃	石錐	掻器	抉入石器	石核	剥片	合計
玉髄	2	1		1		42	46
	1.2	1.5		5.2		286.8	294.7
鉄石英						11	11
						100.9	100.9
珪質頁岩		1	1		1	3	6
		1.2	1.6		3.5	13.4	19.7
黒曜石			1			1	2
			4.4			1.1	5.5
頁岩						1	1
						9.1	9.1
不明						4	4
						15.9	15.9
合計	2	2	2	1	1	62	70
	1.2	2.7	6	5.2	3.5	427.2	445.8

上段が点数、下段が重量(g)

第8表　石材の割合

	点数(%)	重量(%)
玉髄	65.7	66.1
鉄石英	15.7	22.6
珪質頁岩	8.6	4.4
黒曜石	2.9	1.2
頁岩	1.4	2
不明	5.7	3.6

と考えられる。今後の当遺跡の課題としては主な石器石材であると推測できた玉髄の解明であろう。先にも述べた通り玉髄の原産地はまだわかっておらず、それを探るうえでも当遺跡における詳しい分析が必要であろう。（尾田識好）

4）畑野町三宮貝塚

はじめに

本遺跡は畑野町の三宮神社境内に存在する。遺物は神社境内の全域から出土しているが、特に貝塚のある地点は拝殿の前方と左右の山林地であると言われ、広さ1万㎡に及ぶ佐渡最大の貝塚である。縄文中期から晩期まで継続した遺跡で、北隣には弥生玉作遺跡がある。

今回紹介した遺物は、これまで新潟大学医学部第一解剖学教室小片保コレクションの一部として所蔵されていたものである。縄文土器と動物骨などから成る総数約230点の遺物は、そのほとんどに「サド三宮1927年8月13日」と注記されたシールが貼られており、遺物がまとめて保存されていた木箱の中には「三宮貝塚（佐渡）発掘品　昭和二年八月十三日」と記された紙が入っていた。

この発掘調査の経緯については後述するが、同年同日に新潟県史蹟名勝天然記念物調査会（以後は調査会と省略する）が三宮貝塚を訪れていたことを確認している。したがって、この時に収集された遺物が調査会のメンバーの一人であり、後の新潟大学医学部第一解剖学教室の教授となった工藤得安博士の元に渡り、現在に至ったのではないかと考えている。

総数230点余の遺物は、動物骨約70点を除く大部分は中期から晩期にかけての縄文土器である。今回はそのうち74点を選び出して資料化を行った。なお、動物骨については別稿を設けてある。

1．研究略史

三宮貝塚で最初に学術的発掘調査を行ったのは、大阪毎日新聞社長本山彦一と同行して佐渡を訪れた鳥居龍蔵である。1920（大正10）年8月20日、郷土史家の協力を得て発掘を行ったが、現在、その発掘地点は分かっていない。当時鳥居は東京大学人類学教室に籍を置いており、佐渡への来島・遺跡踏査も各地で行っていた調査の一環であったと見られる（鳥居1925）。

1924（大正14）年、新潟県は史蹟名勝天然記念物の保存を徹底させるために調査会を発足させた。

そして1927（昭和2）年の8月12日から18日まではこの調査会が佐渡島内での遺跡調査を実施した。調査会の構成員には内務省嘱託の荻野仲三郎や県委員齋藤秀平、山本半蔵、新潟医科大学（後の新潟大学医学部）工藤得安博士（第一解剖学教室教授）等がその名を連ねており、8月13日には三宮貝塚を訪れて調査を実施したことが確認されている（川上1928）。詳しい調査内容は不明であるが、今回資料化した遺物は、この時の調査によって得られたものである可能性が極めて高いと思われる。また、この調査結果は1932年の『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯に掲載されてはいるが、今回の報告資料について

は掲載していない。

同じく1927（昭和２）年の４月15・16日には、当時京都大学病理学講座教授の座にあった清野謙次が慶応大学医学部川上漸、郷土史家山本半蔵・本間周敬らと共に約30坪程度の発掘を行っている。この調査結果については『日本貝塚の研究』に詳しい記述がある（清野1969）。

1958（昭和33）年９月５・６日には、日本考古学協会の発掘の一部として八幡一郎・本間嘉晴・椎名仙卓らによる発掘が行われ、遺跡が後期を主体にして中期末から晩期までにまたがることが明らかにされた（八幡・椎名1960）。

さらに1961（昭和36）年には７月６日から13日にわたって、立教大学博物館学講座・新潟大学医学部第一解剖学教室・佐渡博物館の共催で発掘調査が行われた。この時には大量の土器片・石器などに加えて人骨も出土している。発掘終了後は人工遺物・自然遺物が立教大学に、出土人骨は新潟大学医学部にそれぞれ持ち帰られたという（佐渡博物館1963）。

以下、土器について分析を行う。

中期（第10図１～13）

前葉（第10図１～５）

土器はいずれも地文に縄文をもち、主に半截竹管による平行沈線が施されるものである。

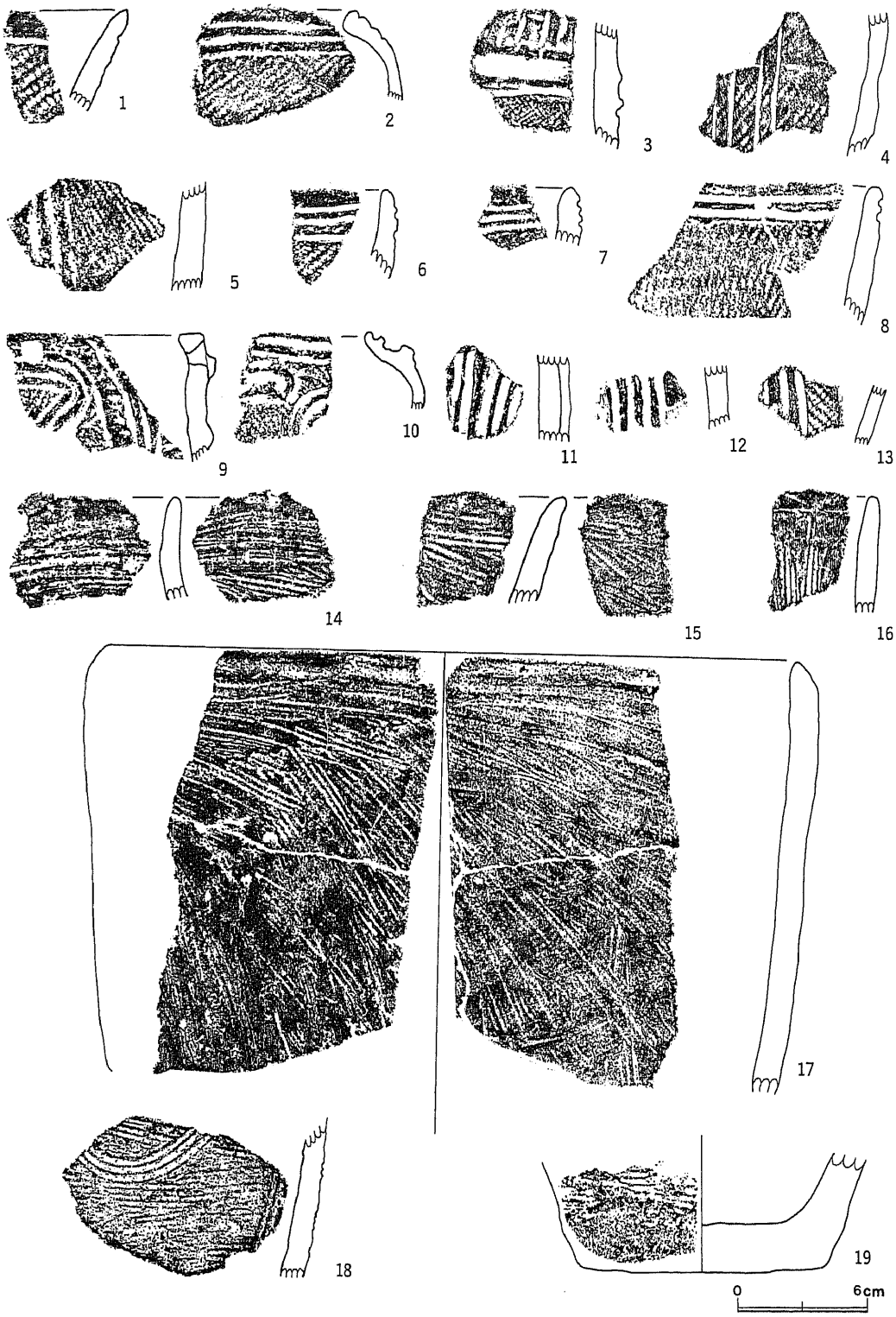
１は単節LR縄文を地文に、口縁部に平行して１条の沈線を引いたものである。２も同様の手法と思われるが、半截竹管による沈線が口縁部に平行して３条施され、断面はカマボコ状を呈す。内彎し、器形はキャリパー形土器であるとみられる。３は中央に指ナデによって横位の隆帯を作り出し、その上部は縦位の平行沈線、下部は縄文を施している。４は地文に単節LR縄文をもち、半截竹管による平行沈線を縦位に４条施している。５は単節RL縄文を地文にもち、半截竹管による沈線を３条施している。

中葉（第10図６～11）

６～８は口縁部に平行して沈線が施されるものである。６は単節LR縄文の地文の上に棒状工具による沈線を３条施しており、７はカマボコ状を呈す断面形状から半截竹管を用いているものと思われる。８は摩滅しており判然としないが、おそらく単節LR縄文の地文の上に棒状工具による沈線を施している。９は口縁部下を穿孔し、その横から縦位に竹管によるキザミをもつ隆帯を貼り付けている。隆帯の周囲は半截竹管によって沈線を施し、右回りの急なカーブを描いている。10は口縁部に平行して半截竹管による沈線を施しているが、沈線よりも竹管によってできた隆帯が特徴である。隆帯の下には粘土を貼り付け、棒状工具により沈線を施しており、ワラビ手状渦巻文の一部とみられる。11は縦位に隆帯が並び、中央の太い隆帯は断面が三角形に近く、馬高式とみられる。

後葉（第10図12～13）

12は縦位に沈線を施し、馬高式ほどの隆起はみられない。加曾利Ｅ式が変容したものと思われる。13は地文に単節RL縄文をもち、縦位に平行沈線が３条施される。



第10図　三宮貝塚土器実測図 1

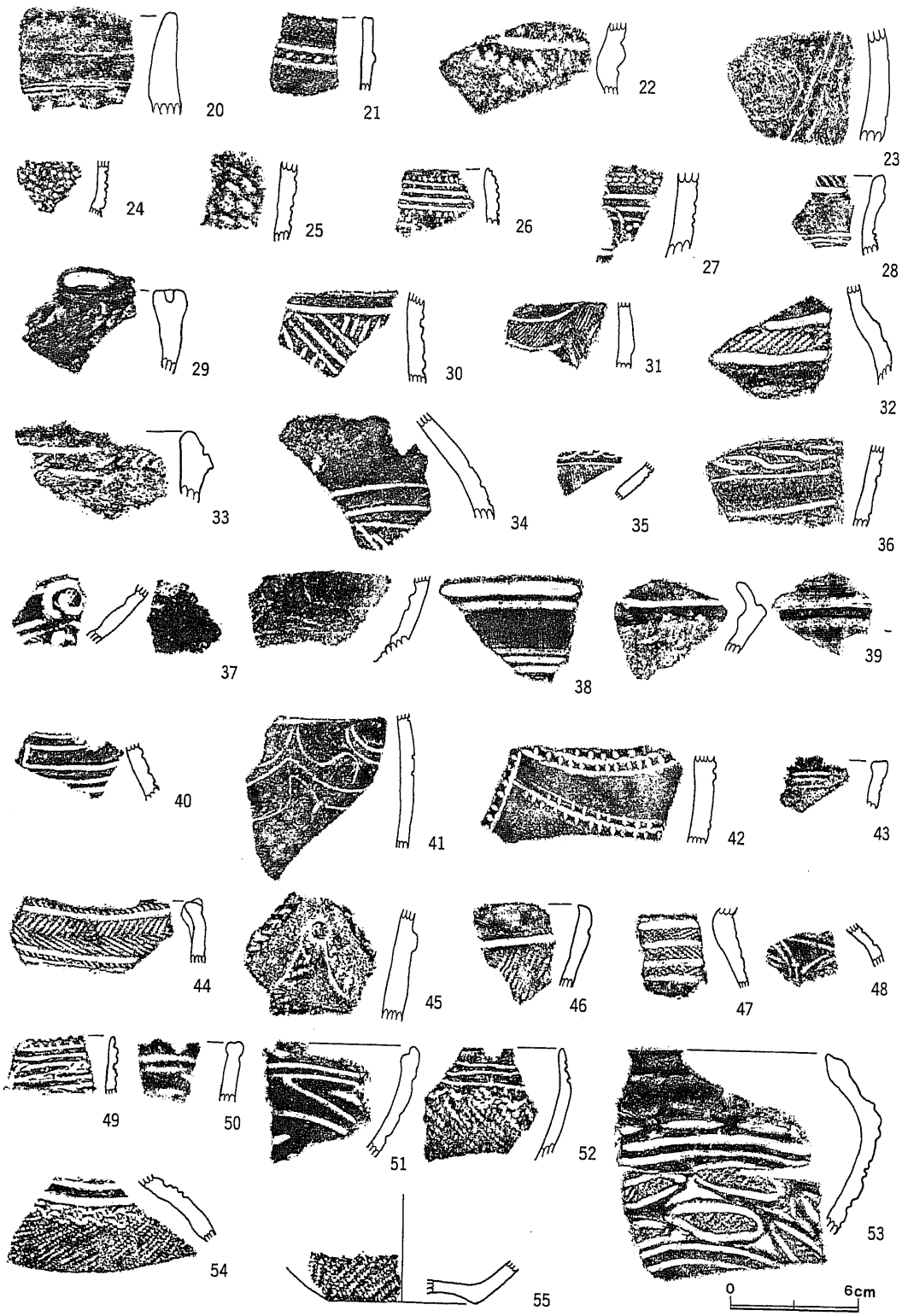
後期（第10・11図14～48）

前葉（第10・11図14～34）

14～20は貝殻条痕文を施すものである。14・15は共に口縁部で内面・外面に横位の条痕が見られる。16は口縁部に平行して沈線が1条施され、その下には縦位の条痕がみられる。17は口縁部から胴部にかけての粗製深鉢の一部であり、内面・外面共に右下から左上への条痕が見られる。18は横位に条痕文を施した後、弧状・縦方向に貝殻条痕文を施文している。他の条痕文土器片と異なり、色調は明るい浅黄橙を呈し、器面調整というよりは文様効果を目的としたものと考えられる。19は粗製深鉢の底部であり、横位に条痕文が施されている。20はナデによる整形を行ったのち、口縁部に平行して沈線を施しており、全面に貝殻条痕文を施す他の土器片とは異なるものである。21はナデによる整形を行い、横位の隆帯を1条作り出している。隆帯を挟むように半截竹管による沈線が施され、隆帯の上にはキザミ目が加えられている。22は「く」の字状に内曲し、口縁部に近い部分であると思われる。隆帯に沿って下部には丸棒状工具で垂直の刺突を施している。右側半分は隆帯が欠落しており、判然としないが、三十稲場式に類似のものと思われる。23は沈線による施文がなされ、胎土などから三十稲場式のものとみられる。24・25は刺突文をもつもので、24は丸棒状工具を垂直に刺突したもの、25は篦を用いた円形刺突文である。26は横位に半截竹管による沈線4条を施し、その上下に沿って丸棒による刺突文を施している。胴部側では一部刺突文と沈線が弧状に施文されており、曲線を描く文様を構成するものと考えられる。27は竹管による平行沈線に沿って上部に丸棒による刺突文を加えており、下部には26と同様弧状を描く沈線と刺突文が施文され、堀之内2式とみられる。28は口唇部にキザミ目をもち、その下には横位の沈線が施される。ナデによる整形で無文部分をつくりだしたのち、棒状工具による沈線を3条施している。やや外傾し、堀之内式の浅鉢と思われる。29は外面・内面をナデによる整形を行っている。口唇部は厚く楕円状の突起を作り、内部に深い溝をもつことが特徴的である。30は沈線が施されるものである。横位の沈線と左上から右下にかけての斜位の沈線間に、短く深い沈線がはっきりと施されており、三角形をモチーフとした堀之内1式と見られる。31・32は地文の縄文を沈線で区画し、他の部分を磨り消す磨消縄文が施され、堀之内式のものとみられる。33は口縁部に沿ってキザミをもつ隆帯が配され、上側には沈線が1条施されている。口唇部は一部欠損しているが、突起が付き、すぐ脇に穿孔されていることが確認できる。34はナデによる整形を行った無文地上に、明瞭な沈線を施すものであり、南三十稲場式のものとみられる。

中葉（第11図35～42）

35は黒色磨研土器で横位に1条の沈線が施され、その上には括弧形の沈線がみられる、加曽利ＢⅠ式である。36はナデによる整形を行ったあと、浅いクランク状の沈線とその下に平行沈線を配すものである。37～39は内面に特徴的な文様を持つものである。37は内面に棒状工具による渦文と横位に沈線を施す。38は内面にヘラによるミガキを行ったあと半截竹管を強く押し引いてカマボコ状の隆帯と沈線を施している。39は内面が丁寧に研磨され、半截竹管による隆帯をつくりだしている。これら内面に文様が施される土器のいずれ



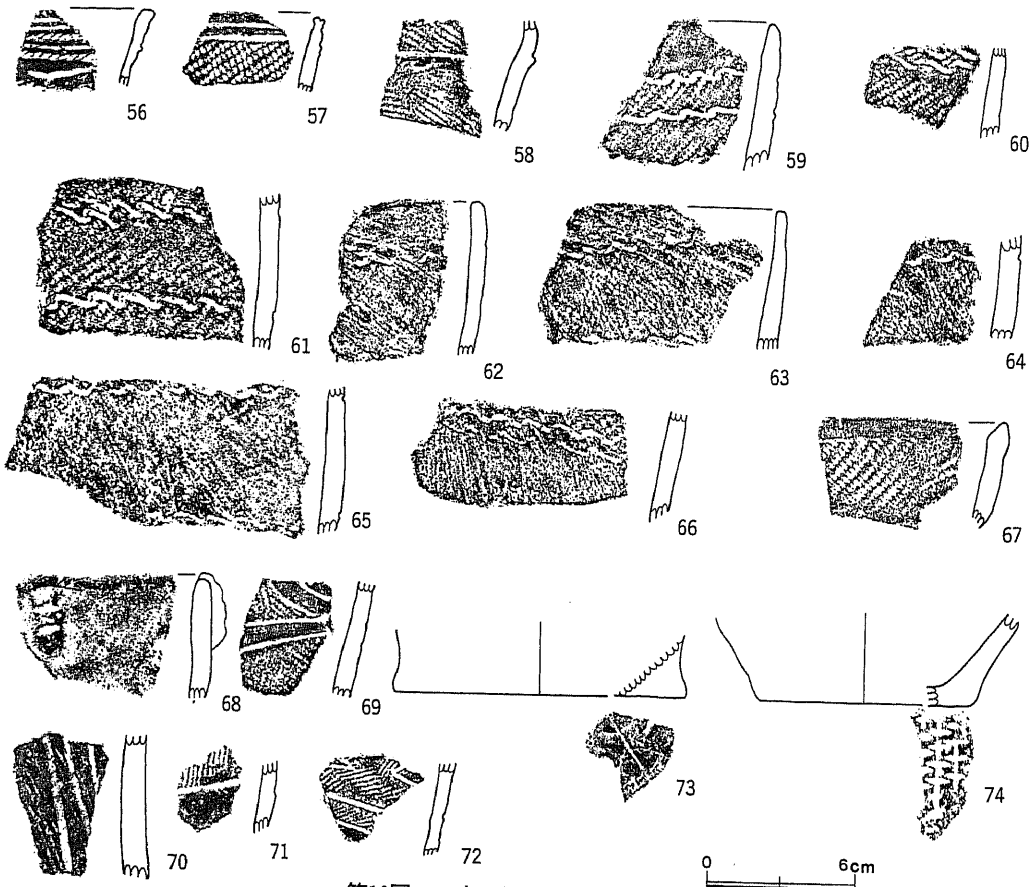
第11図　三宮貝塚土器実測図 2

も、器形は浅鉢と見られ、内面に比べて外面の調整が粗い。39のみが外面に沈線１条を施している。これらは加曽利ＢⅠ式とみられる。40はナデによる整形を行ったあとにヘラによる平行沈線を施し、一部コの字状になっている。器形は注口土器と思われる。41はヘラによる浅い沈線で文様を描くもので、径が小さく、筒状の器形を呈すものと思われる。加曽利ＢⅡ式である。42はナデによる整形を行ったあとに半截竹管による沈線を施し、沈線間に竹管による縦方向のキザミをいれており、加曽利ＢⅢ式とみられる。43は平口縁に突起が付いたもので、口縁部に沿って沈線が３条みられる。44は羽状縄文を施した後、口縁部に平行して沈線を２条施したものである。43と同様に平口縁状に小突起がみられる。胎土から判断して搬入品と思われる。45は波状口縁とみられ、口縁部にキザミがいれられている。中央に貼り付けられている小突起からは、胴部にかけて２条の沈線が口縁に沿うように施され、沈線の右側には縄文を押しつけている。46は地文に縄文を施し、口縁に沿って沈線を１条施している。外面の口唇部から沈線までと内面は、ヘラによるミガキが行われている。47は縄文の地文の上に平行沈線を施すものであるが、縄文の方向が交互に異なっている。48は竹管による沈線が施されるもので、注口土器と思われる。小突起が付く曽谷式のものと思われる。43～46は加曽利ＢⅢ式から曽谷式に併行するものである。

晩期（第11・12図49～66）

49は鋸歯状の口唇部に沿ってひご状の施文具による浅い刺痕列がめぐらされている。その下には、複数の竹管による平行沈線間に楕円形の刺突文を配している。この刺突文は口唇部の刺突よりもやや大きくはっきりとしている。大洞ＢＣ式で、外面はやや赤みがかった色をしている。50の口唇部はややふくらみを持ち、粗い刻みをめぐらす。口唇直下から文様帯となっており、縄文の上に弧線を重ねたとみられるが表面が風化しているので明らかではない。大洞Ｃ1式の皿型浅鉢。51は外面に縄文を施しておらず、全面にヘラ磨きを施す。そして口唇部にわずかなふくらみと小突起を持ち、その内側には細かい刻み目が入れられている。口縁部は上端でやや外側に彎曲し、外面には雲形文の一部と思われる沈線を持つ。大洞Ｃ1式に属する浅鉢であることは50と共通するが、椀型であるところが異なる。52の口唇部は非常に薄く一部が欠けている。口縁部は外側に彎曲し、上部にヘラ描きの浅く粗い３本の沈線、下部には結節縄文を有する。50・51と同様に大洞Ｃ1式。外面の赤みが強いことも特徴的である。53は内外面にヘラ磨きを施す。口縁端部に浅い段を持ち、肩が「く」の字型に張った器型である。ヘラ描きで、山型をした隆帯の上から重ねた一定間隔の楕円文と平行沈線をめぐらせている。肩部から胴部にかけて平行沈線で区画した間の文様帯には、背中合わせ上下２段に磨消縄文による長楕円を連続させた雲形文を配している。大洞Ｃ2式。54は注口土器の肩部とみられ、上端にはヘラ描きによる深い沈線、下部には結節縄文を持つ。大洞Ａ式。55の底部は平底ではなく内側に反り返っており、体部には単節ＬＲ縄文を持つ大洞Ａ式の土器である。

56は表面に磨きがかかり、複数の浅い沈線文とヘラ先による浅い刻み目が口縁に平行してめぐらされている。また、わずかな隆帯の上に刻みを入れた口唇部が一部残存する。外



第12図　三宮貝塚土器実測図3

第9表　三宮貝塚土器観察表1

遺物No.	器種	外面	内面	胎土 A	B	C	D	E	F	G	H	焼成	色調外面 色調内面	部位 残存率	口径 底径	残存高 器厚	備考
1		口縁部上端に棒による沈線1条・単節LR縄文			△							不良	にぶい黄橙 10YR7/4 明黄褐 10YR6/6	口縁部 —		4.9 1.0	金雲母少量含む
2	深鉢	単節LR縄文・竹管による沈線3条			○		△					不良	にぶい黄橙 7.5YR7/4 橙 7.5YR6/6	口縁部 1/9周	13	4.5 1.0	金雲母少量含む
3		棒による沈線(タテ・ヨコ)・隆帯			○	△						不良	橙 5YR6/6 橙 5YR6/8	胴部		5.4 1.4	金雲母少量含む
4		単節LR縄文の上に竹管による沈線		△	△				△			不良	淡黄 2.5YR8/3 浅黄橙 10YR8/4	胴部		6.4 0.9	金雲母少量含む
5		単節RL縄文・竹管による沈線			○	△						不良	灰白 7.5YR8/1 にぶい黄褐 10YR7/4	胴部		4.8 1.3	金雲母少量含む
6		口縁部上端に棒による沈線3条・単節LR縄文		△	△		△					不良	浅黄橙 10YR8/3 にぶい橙 10YR7/3	口縁部 —		3.4 0.9	金雲母少量含む
7		竹管による沈線3条			△	△						不良	にぶい黄褐 10YR6/3 褐 10YR4/6	口縁部 —		2.6 1.1	金雲母少量含む
8		単節LR縄文の上に棒による沈線2			○							不良	にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙 10YR7/4	口縁部 1/10	22	6.3 1.1	金雲母少量含む
9		口縁部下に穿孔・隆帯の上に刻み・半截竹管による沈線		△	○							不良	浅黄橙 7.5YR8/6 にぶい橙 10YR5/3	口縁部 1/18 周	21	5.9 1.3	金雲母少量含む
10		竹管による沈線・隆帯			○							良好	橙 5YR6/8 橙 5YR7/6	口縁部 1/8周	8	4.4 1.2	

胎土凡例　A 石英,　B 長石,　C 輝石,　D 角閃石,　E チャート,　F 褐鉄鉱,　G 黒雲母,　H 海綿骨針

（単位はcm）

第10表　三宮貝塚土器観察表2

遺物No.	器種	外面	内面	胎土 A	B	C	D	E	F	G	H	焼成	色調外面 色調内面	部位 残存率	口径 底径	残存高 器厚	備考
11		隆帯・沈線		△	○	△						不良	橙 7.5YR7/6 黄褐 7.5YR7/8	胴部		3.8 1.5	
12		棒による沈線4条		△	△							不良	橙 7.5YR6/8 にぶい褐 7.5YR5/3	胴部		2.8 0.9	
13		棒による沈線3条・単節LR縄文		△	△				△	△		不良	にぶい橙 7.5YR7/3 橙 7.5YR7/6	胴部		2.7 0.7	
14	深鉢	貝殻条痕文(ヨコ)	貝殻条痕文(ヨコ)	△	◎				△			良好	浅黄橙 7.5YR8/4 橙 7.5YR7/6	口縁部 –	24	4.5 0.9	
15	深鉢	貝殻条痕文(ヨコ)	貝殻条痕文(ヨコ)	○	△	△				○		良好	橙 7.5YR4/6 にぶい黄橙 10YR7/4	胴部		5.3 1.2	
16	深鉢	羽状縄文		△	△				△			良好	灰白 10YR8/2 褐灰 10YR4/1	胴部		4.4 0.7	
17	深鉢	貝殻条痕文		△	○	△			△			良好	橙 7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6	口縁部 –	32	19.5 1.4	
18	深鉢	貝殻条痕(ヨコのちタテ)		△	△	△			△			良好	浅黄橙 10YR8/3 明黄褐 10YR7/6	胴部		7.4 1.1	
19	深鉢	一部貝殻条痕文		△	○	△			△			良好	にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい黄橙 10YR7/2	底部	12	5.4 2.2	
20	深鉢	棒による沈線・ナデ		△	○	△			△			良好	浅黄橙 7.5YR8/4 灰白 7.5YR8/1	口縁部 –		4.5 1.6	
21		口縁に平行した細い隆帯上に刻み目			◎	△	△					良好	浅黄橙 10YR8/4 にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 –		3.5 0.6	
22		棒による沈線・刺突文		△	△				△			不良	黄橙 10YR8/6 明黄褐 10YR7/6	胴部		3.1 1.3	
23		ヘラによる沈線		△	△				△			不良	浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙 7.5YR8/4	胴部		5.0 0.9	
24		刺突文		△	△				△			良好	橙 7.5YR6/8 橙 5YR6/8	胴部		2.8 0.7	
25		刺突文		○	○	△				○		良好	橙 7.5YR6/8 灰褐 7.5YR5/2	胴部		3.2 0.8	
26		口縁部に平行する複数の沈線文と円形刺突文		△		△	△					不良	明黄褐 10YR7/6 黄橙 10YR8/8	口縁部 –		2.8 0.4	
27		沈線文・刺突文		○	△	△			△			不良	浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3	胴部		2.5 0.7	
28		へらによる沈線・ナデ		△	△							不良	明黄褐 10YR6/6 黒褐 10YR3/1	口縁部 –		0.5 3.7	
29		口唇部にくぼみ			△	△			△			不良	にぶい褐 7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR7/4	口縁部 –	12	3.8 1.6	
30	深鉢	沈線文		△	△		△		△			不良	灰白 10YR8/1 灰白 10YR8/2	胴部		4.0 0.8	
31		撚糸文のあとにヘラによる沈線		△	△							良好	黒褐 10YR3/1 灰黄褐 10YR4/2	胴部		3.1 0.6	
32		単節LR縄文・ヘラによる沈線・ナデ		○	△	△			△			不良	黒褐 2.5YR3/1 黒褐 10YR3/2	胴部		4.3 0.9	
33		ヘラによる沈線・隆帯の上に刻み・穿孔・ナデ		△	○	△						不良	浅黄橙 7.5YR8/3 灰白 7.5YR4/2	口縁部 –		3.4 1.5	
34		沈線文			△	△			△			不良	橙 7.5YR6/6 橙 5YR7/6	胴部		5.5 1.1	
35	壺か注口土器	ヘラによる沈線ナデ・		△	△		△					良好	黒 10YR1.7/1 灰黄褐 10YR4/2	胴部		2.2 0.5	表面黒色研磨
36	深鉢	ヘラによる沈線・ナデ		○		△			△			不良	褐灰 7.5YR8/3 にぶい黄橙 10YR7/4	胴部		3.7 0.6	
37	浅鉢		の字状沈線	○	◎	△	△					良好	黒褐 10YR3/1 灰黄褐 10YR4/2	胴部		3.8 0.4	金雲母少量含む
38	浅鉢		竹管による沈線文		○	△	△					良好	暗灰黄 2.5Y5/2 褐灰 10YR5/1	胴部		5.2 0.8	
39	浅鉢	黒色磨研	黒色磨研・竹管による隆起線	○	◎	△						良好	黄灰 2.5Y4/1 黒 2.5Y2/1	肩部		3.9 0.8	
40	注口土器	ヘラ書きの平行沈線		△	○					○		良好	黄褐 10YR5/6 黒褐 10YR3/1	胴部		2.8 0.8	
41		ヘラによる沈線		△	△	△			△			良好	橙 7.5YR7/6 にぶい黄橙 10YR7/4	胴部	19	6.0 0.6	
42		竹管による沈線・ナデ		○	△	△						良好	灰黄褐 10YR4/2 にぶい黄褐 10YR6/4	胴部	30	4.0 0.9	
43		口唇部に突起・口縁に平行した浅い沈線		○	○	△						良好	明褐 7.5YR5/6 浅黄橙 10YR8/4	口縁部 –		2.6 0.8	

胎土凡例　A 石英,　B 長石,　C 輝石,　D 角閃石,　E チャート,　F 褐鉄鉱,　G 黒雲母,　H 海綿骨針　　(単位はcm)

第11表　三宮貝塚土器観察表3

遺物No.	器種	外面	内面	胎土 A	B	C	D	E	F	G	H	焼成	色調外面 色調内面	部位 残存率	口径 底径	残存高 器厚	備考
44		羽状縄文・ヘラによる沈線		○		△	△		△			良好	浅黄橙 10YR8/3 灰白 10YR8/1	口縁部 2/9周		2.8 0.8	搬入品か
45	深鉢	半截竹管による刻み・豆粒状の突起		◎	△	△				○		良好	浅黄橙 7.5YR8/3 浅黄橙 7.5YR8/3	口縁部 －		5.1 1.1	
46		口唇部にミガキ・口縁部に沈線・縄文	ミガキ		○							良好	黒 10YR2/1 灰白 10YR8/2	口縁部 －		4.0 0.8	
47		単節LR・RL縄文ヘラによる沈線		△	○							不良	灰黄褐 10YR4/2 にぶい黄褐 10YR7/2	脚部		3.7 0.8	香炉型土器の脚部か
48	注口土器	ヘラによる沈線		△	○		△		△			良好	灰白 10YR8/2 灰黄 2.5YR6/2	胴部		2.2 0.4	
49	浅鉢	ヘラによる沈線・刺突文		△	○	△						良好	浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙 7.5YR8/3	口縁部 1/18		2.7 0.4	
50	浅鉢	ヘラによる沈線・ナデ		△	○					△		良好	浅黄 2.5Y8/3 灰黄 2.5Y7/2	口縁部 －		2.8 0.7	皿型浅鉢
51	浅鉢	雲形文	口縁部に刻み	○	△							良好	灰黄褐 10YR6/2 灰黄褐 10YR5/2	口縁部 －		5.1 0.7	椀型浅鉢
52	浅鉢	結節状文・ヘラによる沈線		△	○				○			不良	明赤褐 2.5YR5/8 にぶい黄褐 10YR7/4	口縁部 1/24	18	5.0 0.5	
53		雲形文		○	△	△			○	△		良好	にぶい黄橙 10YR7/3 灰白 10YR8/2	口縁部 －	9	9.5 0.8	金雲母少量含む
54	注口土器	竹管による沈線と結節縄文		○	○							良好	淡黄 2.5Y8/3 淡黄 2.5Y8/3	胴部		4.2 0.7	
55	浅鉢	底部立ち上がりに単節LR縄文		△	○							良好	明黄褐 10YR7/6 橙 7.5YR6/6	底部 1/3周	7	1.4 0.8	
56	注口土器	へらによる沈線・刺突文		△	○							良好	灰褐 10YR6/2 にぶい黄褐 10YR4/3	口縁部 －		3.0 0.5	金雲母少量含む
57	皿型土器	口縁部に竹管による沈線・胴部に単節LR縄文		△	△	△	△					不良	浅黄橙 7.5YR8/6 にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 －		2.9 0.5	
58		単節縄文・隆帯・ヘラによる沈線		△	○							良好	にぶい橙 7.5YR5/3 にぶい橙 7.5YR6/3	胴部		4.3 0.7	金雲母少量含む
59	深鉢	結節縄文			○	△						良好	黄橙 10YR8/6 にぶい黄褐 10YR7/4	口縁部 1/12	20	5.7 0.8	
60	深鉢	結節縄文		△	△	△			△			良好	淡黄 2.5Y8/3 淡黄 2.5Y8/2	胴部		6.1 0.8	
61	深鉢	結節縄文		○	○	○						良好	淡黄 2.5Y8/4 淡黄 2.5Y8/3	胴部		6.2 0.8	
62	深鉢	結節縄文を上から貝殻などで擦る		△	◎							良好	橙 7.5YR6/8 黄橙 7.5YR7/8	口縁部 －		6.0 0.6	
63	深鉢	結節縄文		△	△	△	△					不良	黄橙 7.5YR7/8 橙 7.5YR7/6	口縁部 1/18		5.5 0.7	
64	深鉢	結節縄文を上から貝殻などで擦る		△	◎							良好	橙 7.5YR6/6 橙 7.5YR7/6	胴部		3.9 0.9	
65	深鉢	結節縄文を上から貝殻などで擦る		△	◎				△			良好	橙 7.5YR7/6 浅黄橙 7.5YR7/6	胴部		5.7 0.9	
66	深鉢	結節縄文を上から貝殻などで擦る		△	△	△						良好	明黄褐 10YR7/6 浅黄橙 10YR8/4	胴部		4.2 0.7	
67		単節LR縄文		△	△	△			△			良好	橙 7.5YR6/8 浅黄橙 7.5YR8/4	口縁部 －	24	4.1 0.8	
68		突起の上に横位の沈線・ナデ		△	△	△			△			不良	黄橙 7.5YR7/8 橙 7.5YR7/6	口縁部 －		4.9 1.3	
69		縄文の上からヘラによる沈線		△								良好	にぶい黄褐 10YR7/3 にぶい黄褐 10YR7/2	胴部		0.7 4.5	
70	深鉢	沈線文		△	○	△						良好	褐灰 5YR5/1 にぶい黄橙 10YR7/4	胴部		5.8 1.0	
71		撚糸文・ヘラによる沈線		△	○		△		△			良好	黒褐 5YR2/1 浅黄 2.5Y7/4	胴部		2.9 0.6	
72		撚糸文・ヘラによる沈線		△	△							不良	灰黄褐 10YR4/2 灰黄褐 10YR7/3	胴部		0.5 3.7	
73		木葉痕		△	△				△			不良	橙 7.5YR6/8 －	底部 1/3周		2.5 1.5	
74		網代痕		△	△							良好	浅黄橙 7.5YR8/3 にぶい橙 7.5YR7/3	底部 1/8周		4.2 1.2	

胎土凡例　A 石英，　B 長石，　C 輝石，　D 角閃石，　E チャート，　F 褐鉄鉱，　G 黒雲母，　H 海綿骨針　　（単位はcm）

面にやや赤みを帯びる57は、口唇にヘラによる浅い沈線を2本めぐらし、口縁部には同じく浅い沈線とその下には単節LR縄文を配する。58は複節縄文を施し、上部にある小さな山型の隆起の上からヘラで浅い沈線を描いている。56から58の3点は晩期後葉に分類される。

59～66にかけては、いずれも単節LR縄文の上に平行する2条の結節縄文を重ねた晩期の粗製土器である。ただし同一個体と思われる62から66にかけての5点は、重ねた縄文の上からさらに貝殻で擦った痕を残しているのに対し、59から61の3点は貝殻による擦痕を有していない。

時代区分が行えなかった底部2点を含む67～72までの8点は、時期不明分としてこの項に一括した。67は内面がユビナデで整形され、無文の口唇部はわずかに外反している。口縁部には単節LR縄文を施す。赤味の強い68は緩やかな小波状口縁に大きな瘤を貼り付け、その上から鋭いヘラ先で3本の刻み目を入れている。69は磨消縄文による浅い沈線文を配している。上部の沈線は弧線の一部かと考えられる。70は施文具で擦った上からタテ方向に非常に浅い複数の沈線を施している。71はやや丸みを帯びた黒色摩研土器である。竹管の背で撫でたような、1本の沈線文に2分された上部には複節縄文がみられる。72は69と同様に磨消縄文による浅い沈線文を配しているが、69よりは沈線がはっきりと描かれている。73と74は底部破片である。73は底面に木葉痕がみられたが、樹種などについては特定できなかった。74では網代痕が確認でき、編み方は平織ではないかと考えられる。

2．小　結

以上の分析から今回資料化した土器は中期前葉から晩期後葉まで幅広い時期に渡ることが確認できた。中期では馬高式などの北陸の影響がみられ、後期には佐渡独自で発達したとされる貝殻条痕文土器や関東の加曽利B式土器、堀之内式土器が顕著になる。このうち加曽利BⅠ式の土器は県内において出土例が少なく、注目されるものである。晩期には搬入された東北の大洞式の土器がみられ、当時は海岸線も近く、海を介しての交流があったことがうかがわれる。本遺跡は住居址と考えられる遺構も発見されており、人の居住があったことが考えられ、第2の道具といわれる石棒や石冠なども出土していることから、当時の遺跡の中では中心的な役割を果たしたものと考えられる。　（武部美恵子・長沢光穂）

5）榎田遺跡

はじめに

新潟大学考古学研究室では、1999年11月及び2002年6月・8月に佐渡踏査を行ない、その際平兵一氏より両津市榎田遺跡の資料を寄贈していただいた。今回は寄贈資料と研究室で表面採集した資料の一部の資料化及び分析を行った。

両津市榎田遺跡は加茂湖の東側、両津市河崎字榎田に位置している。この付近一帯は丘陵地になっており、当時はこの下まで海岸線が及んでいたものと思われる。現在は水田と畑になっている。

今回資料化したものは縄文土器片48点及び不明土器片2点の計50点である。

1．研究略史

榎田遺跡は、明治末年、現在の水尾神社の境内地にある畑地から石鏃２点、勾玉２点が発見されたのに続き、1933（昭和８）年に同神社を現在地に移築するための地ならし工事の際、大量の土器・石器類が出土したため遺跡の存在が次第に明らかになった。

出土品は縄文中期・後期の土器を中心として、平安時代の土師器・須恵器と各種にわたっている。他に、石鏃・石斧・石錘・石槌・砥石といった石器類や骨製釣り針、勾玉などもある（両津市誌編さん委員会1987）。

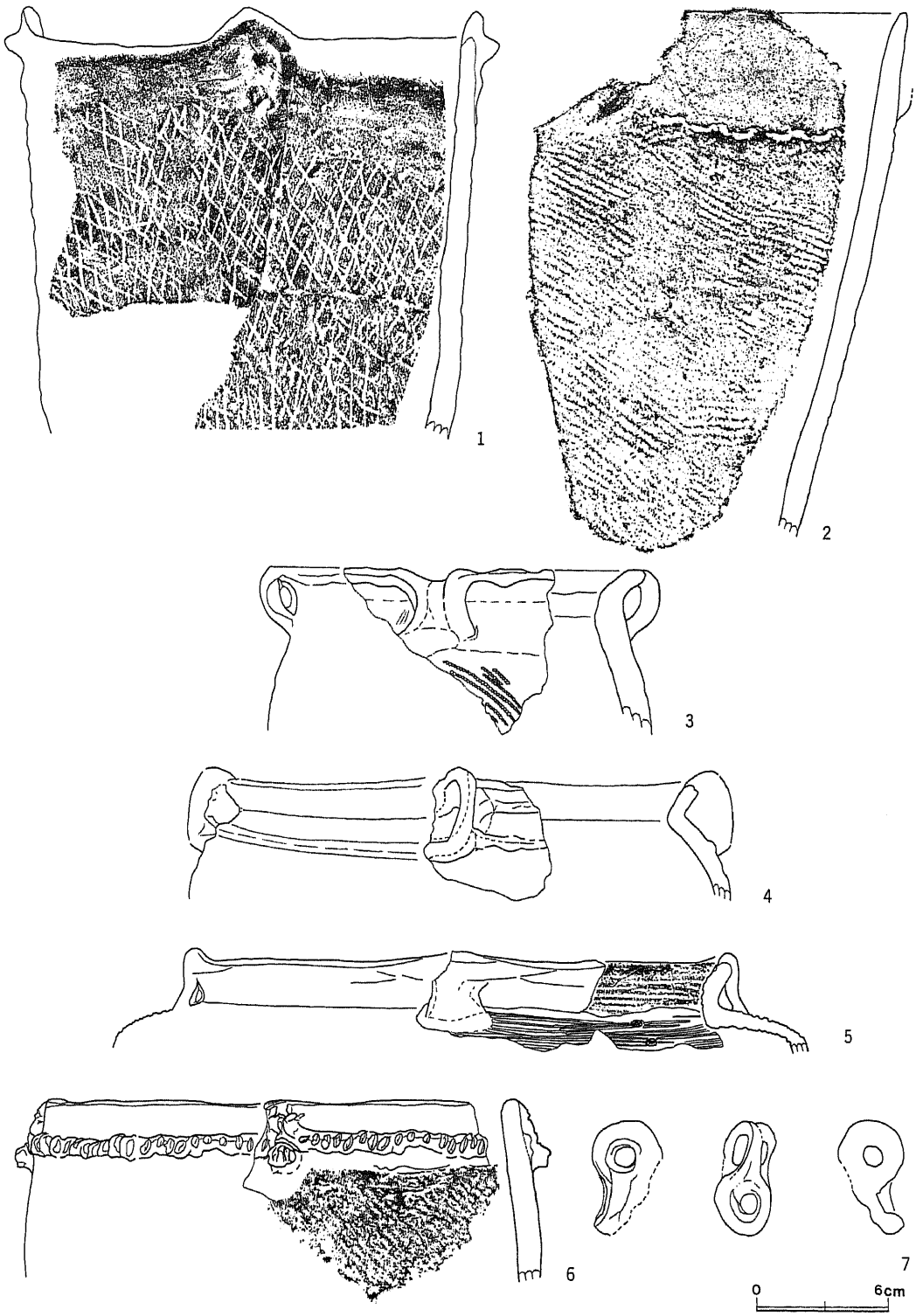
なお、この遺跡は一応の調査はされているものの、正式な調査報告をみない。今後の調査・研究がまたれるところである。

2．遺物の分析（第13～17図）

A．深鉢

１～23は深鉢の口縁部及び口縁部から胴部にかけて残存するものである。

１は突起付口縁で、突起部下には上下２つの瘤状貼付文が認められる。口縁部には無文帯が巡り、胴部には網目状撚糸文が施される。区画文は存在しない。胴部の地文に網目状撚糸文を施す例は、長岡市三十稲場遺跡出土資料中にも数点存在し、中期末葉から後期初頭にかかる可能性が指摘されている（長岡市1992）。２は平口縁で、口縁部無文帯と胴部の地文であるRL縄文を結節縄文で区画する。口縁部無文帯には残存部「ノ」の字状の貼付文が確認できるが、上部は破損しているため詳細は不明である。三十稲場式における深鉢Ｂ群の古段階、後期前葉の２期（田中1989・田中・渡邊1999）に相当するものと思われる。３・５は、いわゆる橋状把手をもつ深鉢で、三十稲場式の深鉢Ａ群に相当するものである。３は、口縁に対してやや斜行し中央がくぼむ橋状把手が取り付けられる。胴部に細かいR撚糸文が施されるが、口縁部無文帯との境には刻み隆帯などの区画は設けていない。把手は２単位の可能性もある。５は小波状口縁を呈するもので、口縁部外面を除き内外面全体に明瞭な貝殻条痕文を施しているのが特徴的である。把手は薄く板状で、片側のみくの字に括れる。隣接する把手と把手のほぼ中間に相当する胴部には、円形竹管による刺突文が上下に２つ施されている。両者の橋状把手は共に貫通し、また口縁部も顕著な波状を呈さないことから、三十稲場式古段階、後期前葉２期に比定される。４は同じ深鉢Ａ群に相当するが、把手は貫通していない。やや摩滅が著しいため、胴部の地文は明らかでないが、口縁部無文帯とは隆帯で区画されている。貫通しない把手やＳ字・８字状の貼付文は深鉢Ａ群の中でも後出的とされ、三十稲場式新段階～南三十稲場式のものと想定される。なお、７は深鉢の把手の部分であるが、逆Ｓ字状にひねりが加えられている。南三重稲場式、後期前葉３期に比定される。６は三十稲場式深鉢Ｂ群に相当する。口縁部無文帯と胴部の地文であるRL縄文を刻み隆帯によって区画している。口縁部中央には棒状・瘤状の貼付文が施され、それぞれ刻みが加えられている。口縁部はやや内湾するが、これは会津地方の地域的特徴であるとも指摘されている（田中1989）。三十稲場式古段階、後期前葉２期に比定される。



第13図　榎田遺跡土器実測図 1

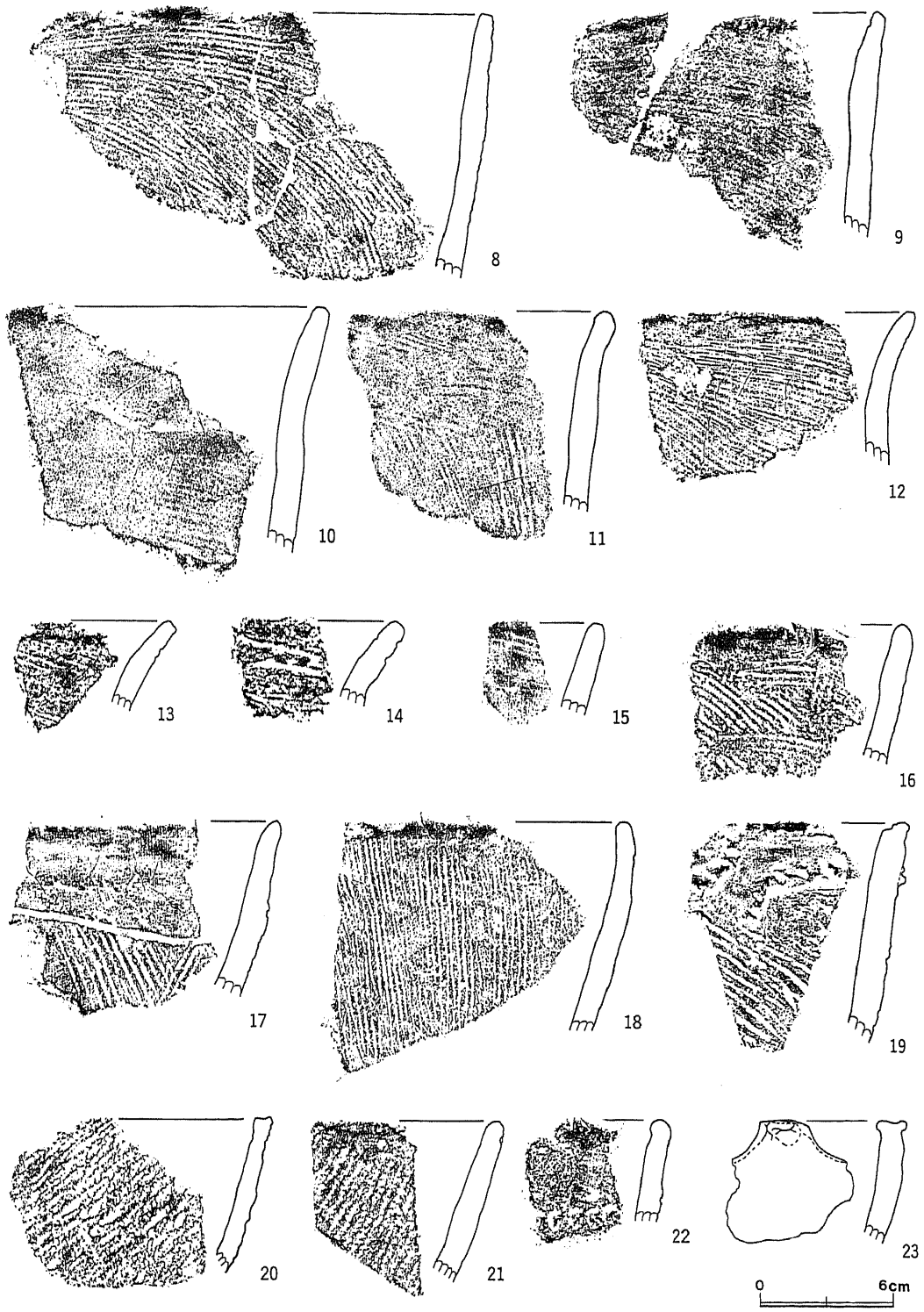
8～17は貝殻条痕文を施すもので、今回寄贈していただいた資料の中では最も多くの割合を占めている。いずれも平口縁と考えられ、口縁端部はほとんどが直立気味に外傾、またはわずかに外反する。多くは胴部全面に斜め（左上～右下）の貝殻条痕文が施されるが、17のように口縁部無文帯をもち、胴部の貝殻条痕文を横方向の沈線で区画するものもある。さらに、8・9・10・16は外面のみでなく、内面にも貝殻条痕が残存している。佐渡においては、本遺跡のほか縄文中期末の長者ヶ平遺跡（小木町）・矢田ヶ瀬遺跡（新穂村）・堂ノ貝塚（金井町）・松ヶ崎神社裏遺跡（畑野町）・吉岡惣社裏遺跡（真野町）、後期初頭の垣の内遺跡（新穂村）・三宮貝塚（真野町）などに同様の貝殻条痕文をもつ粗製土器が見られるとされる（本間・計良1988）。18・19は地文に撚糸文を用いるものである。18は、口縁部から胴部にかけて密なR撚糸文を施し、口縁端部は若干内湾する。19はつながらないX字状の刻み隆帯をもち、胴部にはR撚糸文が施される。同様の刻み隆帯をもつ例は、小千谷市城之腰遺跡（新潟県教育委員会1991）や塩沢町原遺跡（塩沢町教育委員会1998）などに見られ、三十稲場式深鉢B群の古段階、後期前葉2期に比定される。20・21は地文に縄文が用いられるもので、20は第一種の付加条縄文が施される。21は小突起状口縁を呈するもので、突起部には円形の刺突が1点施されている。22は、胴部地文は不明であるが口縁部無文帯と胴部地文を区画すると考えられる半截竹管の連続刺突文が認められる。23は、突起状口縁の突起部である。突起先端部はわずかにくぼむ。

26～39は深鉢の胴部及び頸部である。26は胴部全面に刻み状の沈線が施され、さらに楕円状の沈線文が胴部中腹を巡る。三十稲場式の最新段階、南三十稲場式への移行期に相当するものと考えられる。27～31は貝殻条痕文が施されるものである。多くは、縦及び斜め方向の貝殻条痕文が施されているが、29のように横方向のものもある。また、30は口縁部無文帯と地文の貝殻条痕文を横方向の沈線で区画している。沈線は先端に刻みを入れた工具で施しており、17とよく似ることから、両者は同一固体の可能性がある。32～35は地文に撚糸文が用いられるものである。この内、33は地文の細かいR撚糸文の上に、一部縦方向の結節縄文が施されている。三十稲場式深鉢B群の古段階においては、口縁部貼付文の下部に縄文の結節部を縦回転させる施文がめだつ（田中1989）ということから、本例も同様のものと考えられる。34は単節LR縄文、35はR撚糸文が施される。36・39は胴部に直線状・弧状の集合沈線が施されるもので、39には一部縄文が充填されている。沈線が多用されるのは南三十稲場式の特徴であるが、細い集合沈線で縦位展開の文様を描き、その間に縄文を充填するものは南三十稲場式の新段階に位置づけられる（田中・渡邊1999）。後期前葉3期に比定される。37・38は隆帯が施されるもので、37は胴部と口縁部無文帯を区画する隆帯の一部であると考えられる。両者共に三十稲場式の範疇に含まれる。

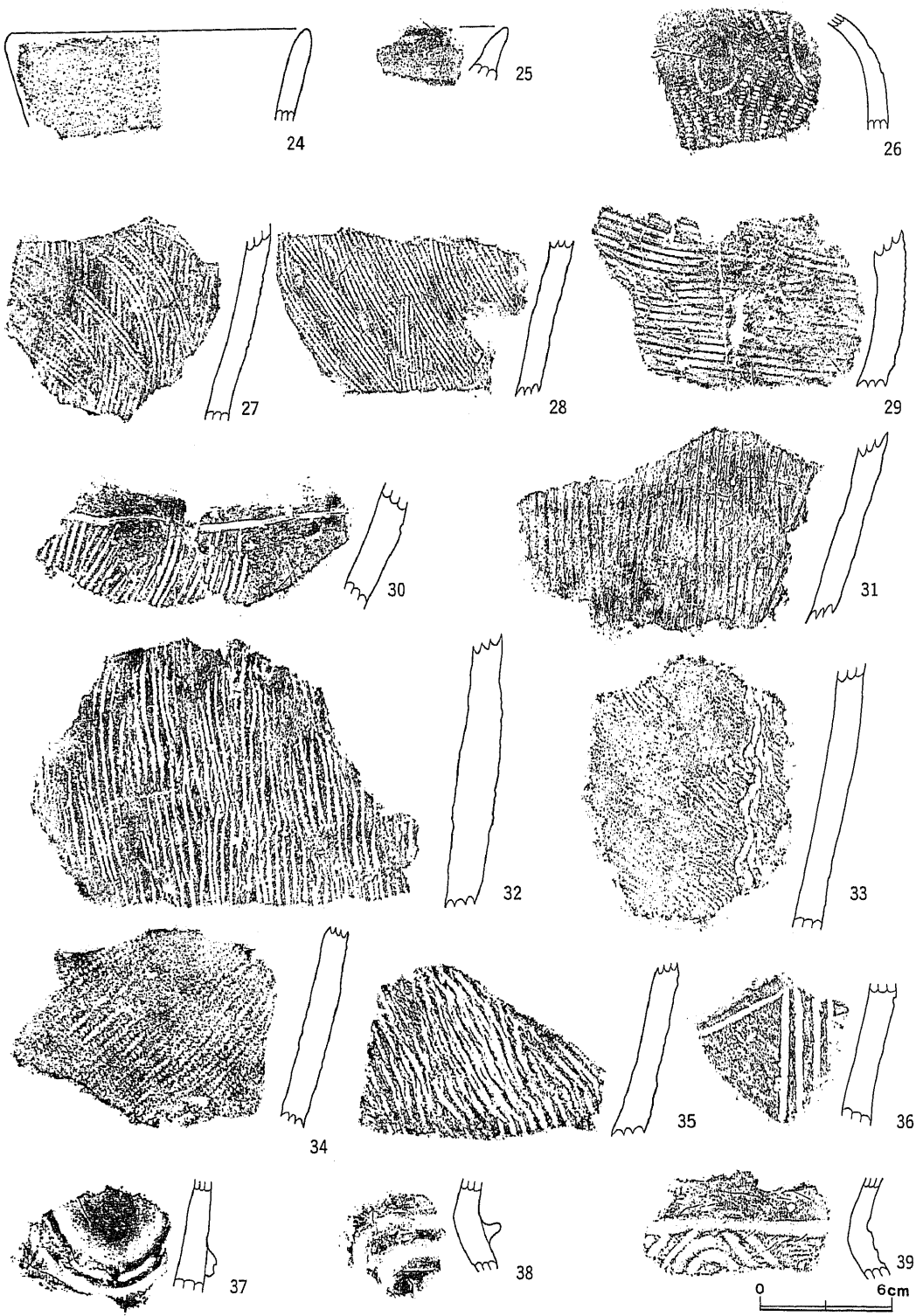
43～50は深鉢の底部である。底面の器厚が2cm前後の、厚手で復元径14cm程の大型のものと、1cm前後の薄手で復元径5～10cm程の中・小型のものがある。48・49は底部下方まで貝殻条痕文を施し、最下方をナデている。43は内面にも貝殻条痕の痕跡が確認できる。

B．鉢

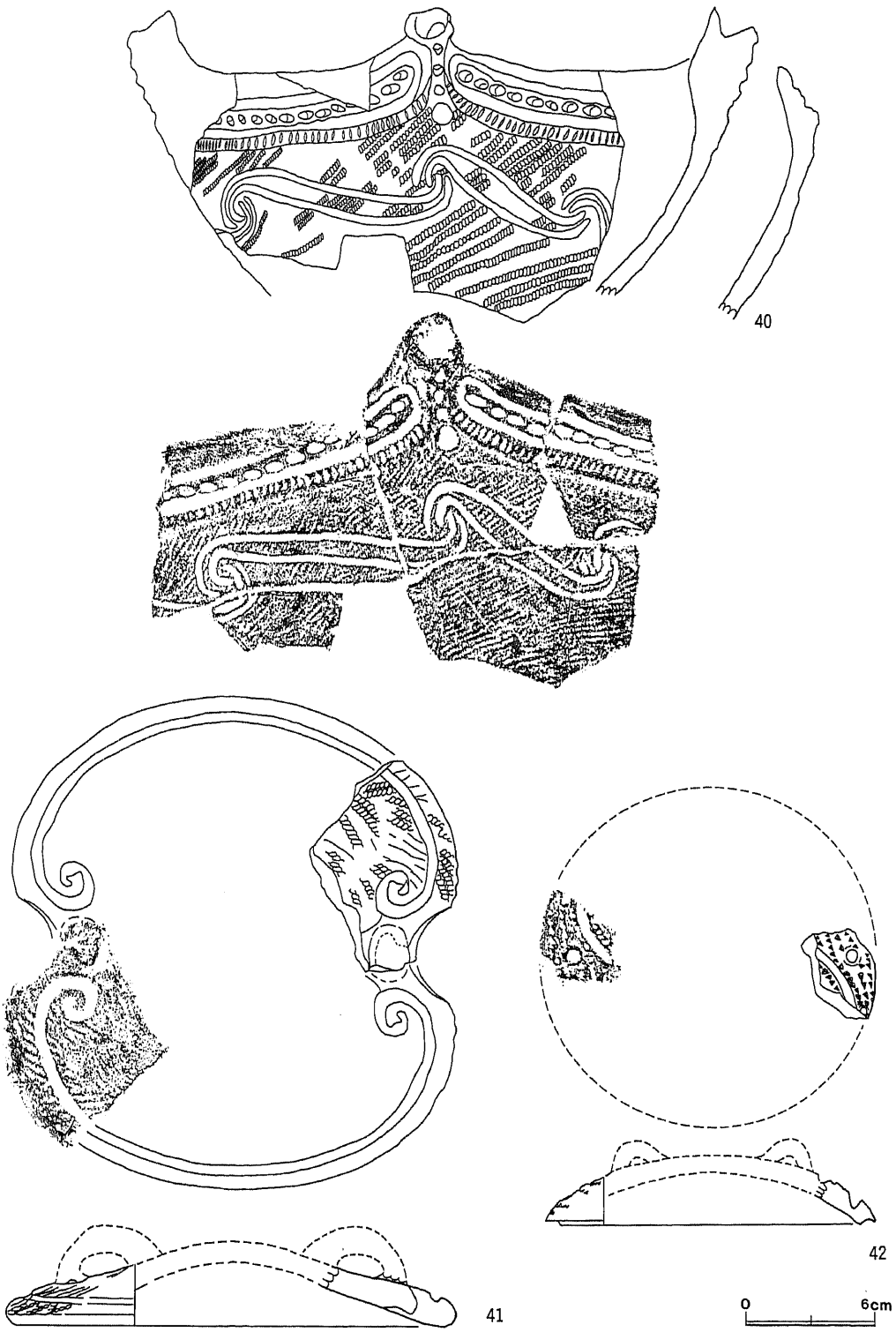
40は口縁部が内傾する波状口縁の鉢で、突起部先端には窪みがあり、表面には大小4つ



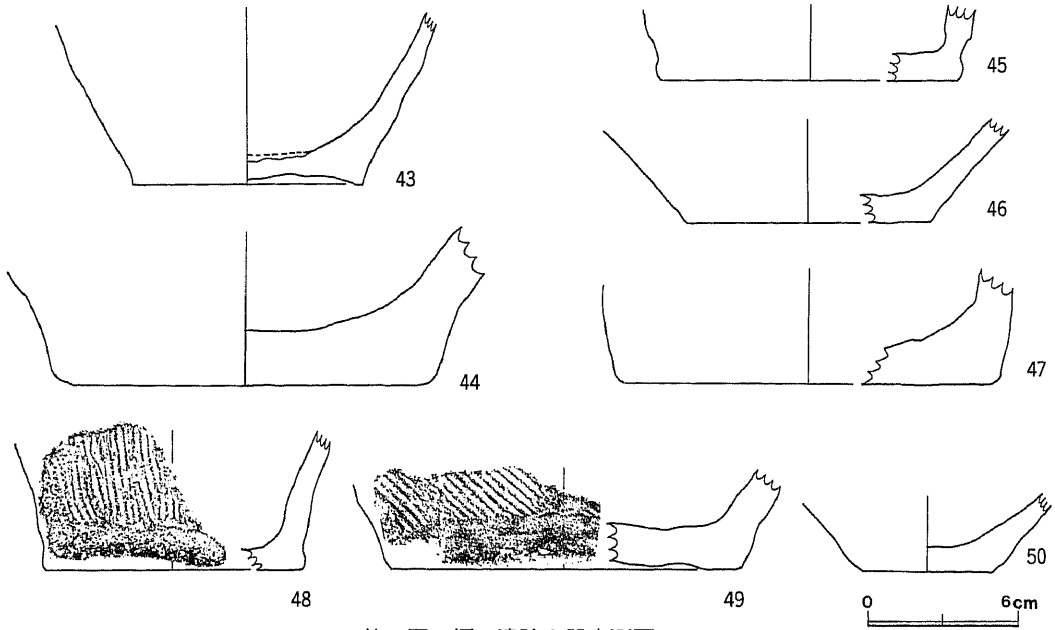
第14図　榎田遺跡土器実測図 2



第15図　榎田遺跡土器実測図3



第16図　榎田遺跡土器実測図 4



第17図　榎田遺跡土器実測図5

第12表　榎田遺跡土器観察表1

遺物No.	器種	外面	内面	胎土 A	B	C	D	E	F	G	H	焼成	色調外面 色調内面	部位 残存率	口径 底径	残存高 器厚	備考
1	深鉢	口縁部上端は無文。直下は網目状撚糸文			○				△	△		良好	橙 5YR6/6 灰褐 5YR5/2	口～胴 1/3周	20.8 —	19.4 1	波状口縁で突起部に上下二つの瘤
2	深鉢	口縁部無文帯と地文のRL縄文を結節縄文で区画		△	△			○	○			普通	にぶい黄橙 10YR7/3 灰白 10YR8/2	口～胴 1/6周	30.4 —	23.8 1.1	口縁部無文帯に貼付文が一部残存
3	深鉢	口縁部無文帯。橋状把手。R撚糸		△	◎	△			○			普通	橙 5YR6/6 にぶい褐 7.5YR5/4	口縁部 1/5周	16.4 —	7.4 1.2	金雲母少量含む。橋状把手(貫通する)
4	深鉢	口縁部無文帯。橋状把手。隆帯		△	△			△	○			普通	明黄褐 10YR7/6 明黄褐 10YR7/6	口縁部 1/15周	21.4 —	5.9 0.9	橋状把手(貫通しない)
5	深鉢	口縁部無文帯。橋状把手。貝殻条痕(ヨコ)。一部円形竹管による刺突	貝殻条痕文(ヨコ・左上→右下)	△	△			△	△	△	△	良好	淡黄 2.5Y8/3 浅黄橙 10YR8/3	口縁部 1/10周	24.6 —	4.5 0.7	波状口縁。橋状把手(貫通する)
6	深鉢	口縁部無文帯。刻み突帯。RL縄文			○				△			良好	浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3	口縁部 1/6周	21.4 —	8.3 1.1	金雲母ごく少量含む
7	深鉢			△	△			△	△			普通	浅黄橙 10YR8/3 —	把手 —	— —	5.1 1.1	金雲母少量含む
8	深鉢	貝殻条痕文(左上→右下)	貝殻条痕のちナデ		△			△	△			不良	にぶい黄橙10YR7/3 にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 1/8周	30 —	12.1 1.1	
9	深鉢	貝殻条痕文(左上→右下) 口縁上端部ナデ	貝殻条痕のちナデ	△	◎			○	○			普通	にぶい褐 7.5YR6/3 にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/20周	25.2 —	10.1 1.3	
10	深鉢	口縁部無文帯 胴部貝殻条痕文	貝殻条痕のちナデ	○	△			◎				普通	灰白 10YR8/2 灰白 10YR8/1	口縁部 1/27周	25.4 —	11.1 1.3	

胎土凡例　A 石英,　B 長石,　C 輝石,　D 角閃石,　E チャート,　F 褐鉄鉱,　G 黒雲母,　H 海綿骨針　　(単位はcm)

第13表　榎田遺跡土器観察表 2

遺物No.	器種	外面	内面	胎土 A	B	C	D	E	F	G	H	焼成	色調外面 色調内面	部位 残存率	口径 底径	残存高 器厚	備考
11	深鉢	貝殻条痕文 (左上→右下)		△	△			△	△			普通	にぶい黄橙 10YR7/2　灰白 10YR8/2	口縁部 1/10周	29.6 —	9.1 1.2	
12	深鉢	貝殻条痕文(左上→右下)　口縁上端部ナデ			△			△	△			普通	橙 7.5YR6/6 橙 7.5YR7/6	口縁部 1/9周	27 —	7 1	
13	深鉢	貝殻条痕文 (左上→右下)		△	△			○	△			普通	灰黄褐 10YR6/2 灰黄褐 10YR6/2	口縁部 —	—	3.6 1	
14	深鉢	貝殻条痕文(横)		○	○				○			不良	にぶい褐 7.5YR5/4 褐 7.5YR4/4	口縁部 —	—	3.8 1.1	
15	深鉢	貝殻条痕文 (左上→右下)		△	△			○	△			良好	にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 —	—	4.1 1.2	
16	深鉢	貝殻条痕文(左上→右下・ヨコ)　口縁上端部ナデ	貝殻条痕のちナデ	○	○			△	△			普通	橙 7.5YR6/6 にぶい褐 7.5YR5/4	口縁部 1/9周	18 —	6.3 1.1	
17	深鉢	口縁部無文帯と胴部の貝殻条痕文を横方向の沈線で区画する			○				△			普通	にぶい橙 7.5YR6/4 橙 7.5YR6/6	口縁部 1/12周	29.6 —	8 1.2	
18	深鉢	R撚糸	工具によるナデ	△	△				△			普通	にぶい黄橙10YR7/4 にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 1/12周	26.4 —	9.5 1	
19	深鉢	口縁部刻み突帯 胴部R撚糸		△	△				△			良好	にぶい黄橙10YR7/4 にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/14周	22.6 —	10 1.3	
20	深鉢	口縁部直下まで単節LR縄文		△	△					△		良好	橙 7.5YR7/6 にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 —	—	7.1 0.9	
21	深鉢	単節LR縄文			○			△	△			普通	にぶい黄橙10YR7/3 にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 —	—	7.2 1.2	突起付口縁
22	深鉢	口縁部無文帯。直下に半截竹管による刺突文の区画		△	△			△		△		普通	にぶい黄橙10YR7/2 にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 —	—	4.6 1	
23	深鉢		工具によるナデ	○	△			○				普通	橙 7.5YR6/6 灰黄　2.5Y6/2	口縁部 —	—	5.5 1.1	口縁突起部
24	不明			○	△			○	△			普通	にぶい橙 5YR7/4 橙 5YR6/6	口縁部 1/5周	14.2 —	4.2 0.9	
25	不明				△		△	△	△	○		普通	にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 —	—	2.4 0.9	金雲母少量含む
26	深鉢	連続刺突文。一部楕円状沈線		△				△				普通	灰白 2.5Y8/2 にぶい黄橙10YR7/2	胴部 —	—	4.8 0.8	
27	深鉢	貝殻条痕 (タテのち左上～右下)			○	△						普通	橙 5YR6/6 橙 7.5YR6/6	胴部 —	—	9 1	
28	深鉢	ヨコの貝殻条痕文			○		△		△	○		不良	にぶい黄橙10YR7/4 浅黄橙 10YR8/4	胴部 —	—	7 1.3	
29	深鉢	左上～右下(一部タテ)の貝殻条痕文		△	△	△				△		普通	灰白 10YR8/2 灰白 10YR8/1	胴部 —	—	6.7 1	
30	深鉢	左上～右下の貝殻条痕。上部にヨコの沈線による区画			△				△			不良	にぶい橙 7.5YR6/4 灰 7.5Y5/1	胴部 —	—	4.9 1.4	17と同一固体か
31	深鉢	タテの貝殻条痕文	工具によるナデ	△	○		△		△			良好	橙 7.5YR7/6 浅黄橙 7.5YR8/6	胴部 —	—	8.5 1.1	
32	深鉢	R撚糸文	ナデ	△	○							良好	橙 7.5YR7/6 にぶい黄橙10YR7/4	胴部 —	—	12.1 1.8	
33	深鉢	地文R撚糸。一部タテの結節縄文			○			△	△	○		普通	にぶい黄橙10YR7/4 にぶい橙 7.5YR6/4	胴部 —	—	12 1.2	金雲母多く含む

胎土凡例　A 石英,　B 長石,　C 輝石,　D 角閃石,　E チャート,　F 褐鉄鉱,　G 黒雲母,　H 海綿骨針　　(単位はcm)

第14表　榎田遺跡土器観察表3

遺物No.	器種	外面	内面	胎土 A	B	C	D	E	F	G	H	焼成	色調外面 色調内面	部位 残存率	口径 底径	残存高 器厚	備考
34	深鉢	単節LR縄文		△	○	△			△			良好	にぶい橙 5YR6/4 にぶい橙 5YR7/4	胴部 —	— 	8.7 1.3	
35	深鉢	R撚糸文										良好	浅黄橙 7.5YR8/4 褐灰 10YR4/1	胴部 —	— 	7.8 1.2	
36	深鉢	集合沈線						◎				普通	にぶい橙 7.5YR7/4 淡黄 2.5Y8/3	胴部 —	— 	6.4 1.3	
37	深鉢	隆帯		○	△			△	△			普通	橙 7.5YR6/8 橙 7.5YR6/6	胴部 —	— 	5 1.3	
38	深鉢	隆帯		△				△				不良	暗灰黄 2.5Y5/2 浅黄橙 10YR8/3	頸部 —	— 	4.2 1.1	
39	深鉢	口縁部無文帯 胴部集合沈線		◎			△	○	△	◎		不良	にぶい黄橙10YR7/4 浅黄 2.5Y7/3	頸部 —	— 	4.4 1.1	金雲母少量含む
40	浅鉢	口縁部沈線の後刺突。肩部刻みのある隆起線文。胴部単節LR縄文の後連続する蕨手状の沈線		△	○				△	○		普通	にぶい黄橙10YR7/4 橙 7.5YR7/6	口～胴 1/2周	24.4 —	12.9 0.9	波状口縁。突起部先端に窪み。先端から胴部に向って4つの刺突
41	蓋	単節LR縄文 渦巻状の沈線		○	△			△	△	△		普通	橙 7.5YR6/6 橙 7.5YR6/6	縁辺部 —	— 	6 1.4	金雲母少量含む
42	蓋	円形刺突文。沈線文。三角形の刺突文		△	△			△				普通	にぶい黄褐10YR5/4 橙 7.5YR6/6	縁辺部 —	— 	3.1 1	金雲母少量含む
43	深鉢		一部貝殻条痕文	△	○	△			△			良好	橙 2.5YR7/8 にぶい橙 5YR7/4	底部 1/1周	 9.2	6.3 1	
44	深鉢			△	◎				△	△		良好	浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 10YR8/3	底部 1/1周	 13.6	4.4 2.2	
45	深鉢				○	○				△		良好	橙 2.5YR6/6 明褐灰 7.5YR7/1	底部 1/7周	 11.6	2.8 1.1	
46	深鉢			△	◎	△			△	○		良好	浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/6	底部 1/4周	 9.6	3.6 1.1	
47	深鉢			△	◎				○			良好	橙 5YR7/6 にぶい橙 7.5YR7/4	底部 1/4周	 14.6	3.8 1.4	
48	深鉢	貝殻条痕文(左上～右下)。最下端部は条痕の後ユビナデ		△	○	○						良好	橙 2.5YR6/6 灰褐 5YR6/2	底部 1/4周	 5.2	5 0.8	
49	深鉢	貝殻条痕文(左上～右下)。最下端部は条痕の後ユビナデ		○	○				△	△		良好	橙 7.5YR7/6 にぶい橙 7.5YR7/4	底部 1/3周	 13.8	3.3 1.5	
50	深鉢			△	◎	△						普通	にぶい黄橙10YR6/4 橙 7.5YR7/6	底部 1/2周	 5.2	2.6 1	

胎土凡例　A 石英，　B 長石，　C 輝石，　D 角閃石，　E チャート，　F 褐鉄鉱，　G 黒雲母，　H 海綿骨針　　(単位はcm)

の刺突が見られる。そのうち、上から3つ目の刺突が最も深くなっている。口縁部は沈線を施した後に棒状の施文具による連続する刺突が見られる。刺突は突起部を中心に斜めに施されている。また肩部には刻み目のある隆起線が、そして胴部には単節LR縄文地に蕨手状の沈線文が施されている。沈線文の受容には東北地方南部の綱取Ⅰ式や関東地方の称名寺Ⅱ式などの影響も考えられており、阿賀野川流域に顕著であるという(田中1989)。よく似た文様構成をもつ土器は、長岡市岩野原遺跡でも出土している(長岡市1992)。三十稲場式の新段階、後期前葉2期に比定される。

C．蓋

41・42は蓋である。41は地文の単節LR縄文を施したのち、縁辺部に沿って渦状の沈線を配置している。環状把手の剝落痕も確認できる。縄文や撚糸文・網目状撚糸文が施され、1対の小さな環状把手が付される例は阿賀野川下流域でめだつとされる(田中1989)。三十稲場式の古段階、後期前葉2期のものと想定される。42は円形の刺突および沈線が施されたのちに、全面を三角形の刺突文で覆っている。やはり三十稲場式の古段階に相当するものと思われる。

D．その他の土器

24・25はいずれも口縁部であるが、器種・時期は不明である。ただし、24は外面が二次的な被熱により赤く変色しているため製塩土器の可能性が、25は土師器の可能性がそれぞれ指摘できる。

3．小　結

以上の分析から、今回寄贈していただいた榎田遺跡の資料の多くは、三十稲場式の古段階～南三十稲場式の新段階、すなわち縄文時代後期前葉2期～3期に相当するものであることが確認できた。佐渡において三十稲場式の土器が出土する主な遺跡は、本遺跡の他、福浦遺跡（両津市）、垣之内遺跡（新穂村）、三宮貝塚（畑野町）、浜田遺跡（真野町）、平城遺跡（赤泊村）などが知られる。この内、両津湾に面して位置するのは本遺跡と福浦遺跡のみである。両津湾は良港として知られ、現在でも多くの人や物資の集まる両津港が所在する。本遺跡出土の土器には会津地方や阿賀野川流域の特色をもつものも含まれていることから、当時から舟での人やモノの交流が活発であったことを想起させる。

また、縄文中期末～後期初頭において、佐渡で特徴的に見られる貝殻条痕文の土器の存在が顕著であることも確認できた。該期の貝殻条痕文土器は、越後ではほとんど見られず、山陰地方や能登半島で断片的に出土していることから、能登経由で佐渡に入ったものと想定されている（本間・計良1988)。能登経由で佐渡に入ったか、それとも佐渡から能登に伝わったかははっきりしないが、越後ばかりでなく能登との交流も盛んであったことが窺い知れる。

したがって、本遺跡では縄文時代中期末～後期前葉を中心に様々な地域との交流が認められ、それらの地域の文化を取り入れつつ独自の文化を発展させていたことを示す例として、重要であるといえる。　　（小池勝典・土屋徹也）

6）畑野町三宮遺跡

はじめに

私たちが畑野町三宮遺跡で表面採集を行ったのは、2002年6月30日及び8月9日・10日である。その目的は、全国的に有名な佐渡の弥生時代玉作資料を収集することであった。今回は玉作関連資料以外の遺物も採集できた。よって、併せて報告することにする。

1．遺跡の位置

三宮遺跡は佐渡郡畑野町字深山に所在する。遺跡は、国仲平野の中央を流れる国府川の支流小倉川と、同じくその一支流である西側の沢との間にはさまれた段丘が、大きく国仲平野に突出した先端近くに位置している。現在では北側に広い水田地帯が広がっており、水田面との高低差は約5 mである。標高は海抜10m弱と推測され、現真野湾の汀線までの直線距離は約2.5kmである。現状は畑と水田になっている。当地には縄文時代後期の遺跡として著名な三宮貝塚も所在している。ただし、今回遺物を採集した地点は村社三宮神社の裏手の畑であり、境内内に見られる貝散布地帯とは少し地点が異なっている。

2．研究史

『新潟県遺跡地図』では、三宮神社境内の三宮貝塚と神社裏手の三宮遺跡とは区別して登録されているが、両者は至近の距離に存在する。また、遺跡地図によれば、昭和54年度までに、三宮遺跡では土師器・須恵器が採集されており、三宮貝塚からは縄文時代の石器・土器の他に弥生土器や須恵器が出土しているとされる(新潟県教育委員会1980)。これらのことから、弥生時代以降、二つの遺跡は一連のものであったと考えられる。そのため、ここでは三宮遺跡だけでなく、三宮貝塚の研究についても述べていくことにしたい。なお、三宮貝塚の縄文時代の遺構及び遺物の研究史については、別に記載があるので触れない。

三宮貝塚は縄文時代中期末から晩期に亘る貝塚であり、大正時代から幾度か発掘調査が行われてきた。そうした中で、縄文時代以外の遺物について初めて報告したのは、昭和3年に清野謙次博士により発表された「佐渡郡畑野村三宮神社境内貝塚の発掘」であった(清野1928)。これは前年の発掘成果を記載したものであったが、この中で、貝塚の上層から須恵器と弥生土器が出土したことを述べている。それらについての詳細な記録は無いが、ここにおいて三宮貝塚から弥生土器及び須恵器が出土することが明確になった。

その後、昭和35年になって、計良由松・椎名仙卓の両氏によって、『佐渡博物館々報（第5号)』に「佐渡三宮貝塚の弥生式土器」という報告がなされた（計良・椎名1960)。その内容は、計良氏が三宮神社拝殿の後方から、それまで佐渡で発見されていたものとは異なった弥生土器を採集したというものであった。三宮神社拝殿後方は、三宮遺跡である。報告には、「当貝塚採集土器は、佐渡では古式の弥生土器に属するものであることから、縄文時代晩期から弥生後期の間を満たす新資料であり、更に縄文式土器との接触を考える上の貴

重な土器と言わねばならない。」と記され、その意義を強調している。ちなみに、その土器に関しては、「数条の平行沈線があって、沈線間の任意に区切った範囲のみは縄文が磨消されている」と記述されている。こうした手法を持つことから、それは弥生時代中期前半に位置付けられよう。計良・椎名氏の報告当時に弥生時代後期とされていた中期後半の竹ノ花式に先行する。

また、『新潟県遺跡地図』には、昭和54年度までに、三宮遺跡で管玉・砥石・石鋸が採集されていたことが記載されている。これによって、三宮遺跡が玉作遺跡であることが知られるようになった。この他には、先にも触れたように、平安時代の須恵器等が採集されている。

3．石器の分析（第18図・19図）

・石鏃（1、2）
共に凸基有茎鏃である。1の断面形状は菱形で、稜線はあまり明瞭ではない。2はII面の中心部が大きく凹んでいる。

・石錐（3）
鉄石英製で、刃部が欠損している。縄文時代のものと思われる。

・R剝片（4、5）
2点をR剝片とした。どちらもリタッチが入っている。4はII面が両極打法により作出されており、左側面には若干の調整が見られる。また上部が切断された痕跡もある。5も4と同様に切断面が見られる。

・抉入石器（6）
1点を抉入石器とした。半分ほど原礫面を留めている。

・尖頭状石器（ナイフ状石器）（7）
背の部分に急角度の調整が施され、一部に刃部を持っている。旧石器時代のナイフ型石器とも考えられるが、本遺跡は縄文時代以降のものであるため、その確率は低いと思われる。

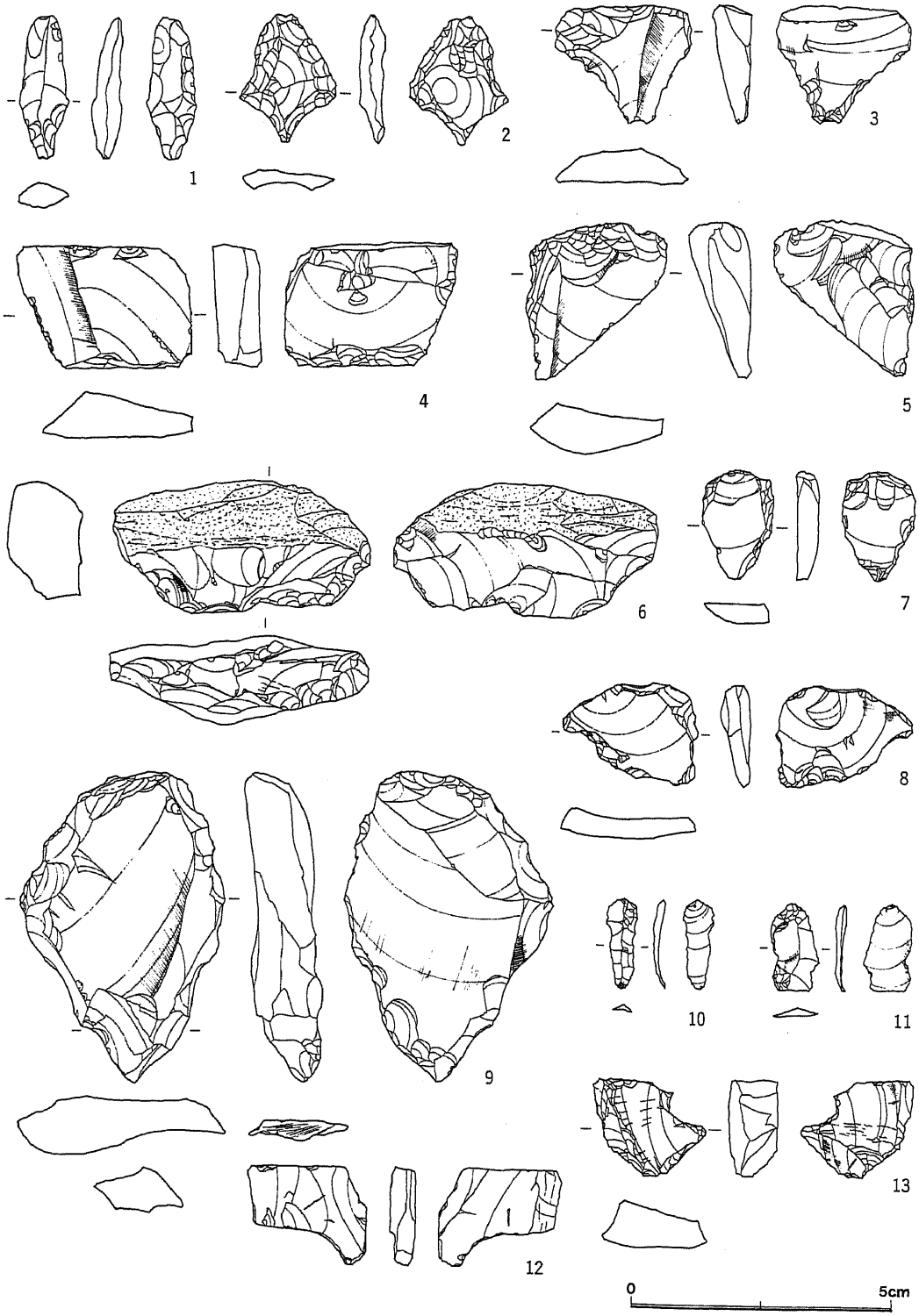
・調整剝片（8）
鉄石英製の剝片が採集されているが、玉作関連かどうかは不明である。

・錐形石器（9）
1点を錐形石器とした。

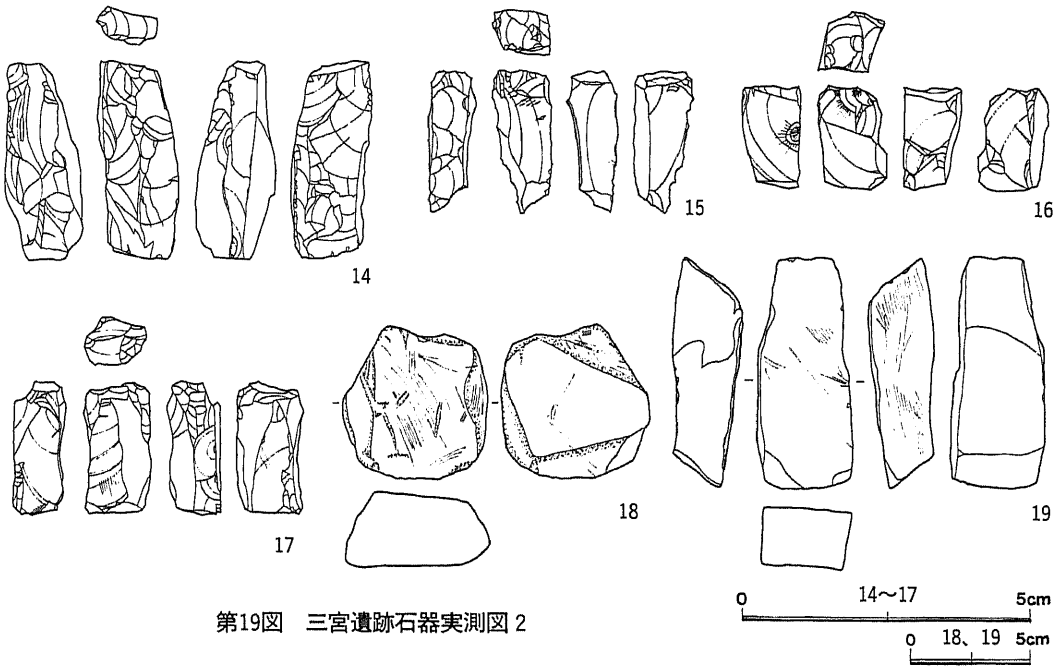
・細石刃か（10、11）
細石刃の可能性のあるものが2点採集されている。10の鉄石英製のものは11に比べ反りが強い。

・石製品（12、13）
2点とも器種不明の石製品である。12は頭部と下部の曲線を描いている面とに擦痕が見られ、両側面が欠損している。

・管玉未製品（14～17）



第18図　三宮遺跡石器実測図 1



第19図　三宮遺跡石器実測図 2

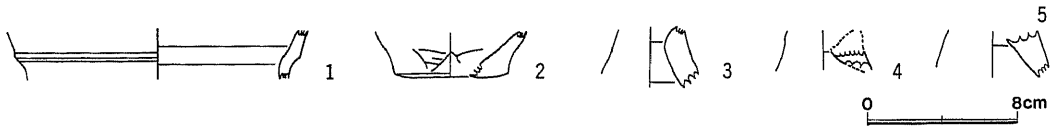
第15表　三宮遺跡石器観察表

遺物No.	種別	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	欠損部位	備考
1	石鏃	頁岩	2.7	1.0	5.0	1.29	完形	凸基有茎鏃
2	石鏃	玉髄	2.9	1.85	5.0	1.51	－	凸基有茎鏃, 未成品
3	石錐	鉄石英	2.72	2.55	0.75	3.82	刃部	右刃
4	R剥片	鉄石英	2.8	3.3	0.9	8.48	－	切断面あり
5	R剥片	珪質頁岩	2.95	2.65	1.15	6.79	－	切断面あり
6	抉入石器	珪質頁岩	2.55	5.0	1.7	21.3	－	未成品
7	尖頭状石器	珪質頁岩	2.08	1.35	0.4	1.44	－	
8	調整剥片	鉄石英	1.95	2.6	0.6	2.75	－	
9	錐型石器	玉髄	5.9	3.95	1.4	29.06	－	
10	細石刃？	鉄石英	1.7	0.6	0.15	0.11	－	
11	細石刃？	碧玉	1.65	0.95	0.2	0.23	－	
12	(不明)	粘板岩	1.85	2.3	0.5	2.47	－	未成品
13	(不明)	碧玉	1.85	2.15	0.95	3.45	－	
14	管玉未成品	鉄石英	3.3	1.35	1.3	6.87	－	未成品
15	管玉未成品	鉄石英	2.84	0.95	0.78	2.45	－	未成品
16	管玉未成品	碧玉	1.7	1.25	1.0	2.6	－	未成品
17	管玉未成品	鉄石英	2.2	1.15	0.9	3.2	－	未成品
18	磨石	頁岩	6.08	5.75	3.65	150.1	－	
19	砥石	凝灰岩	9.1	3.9	2.7	120.18	－	

第16表　三宮遺跡土器観察表

遺物No.	器種	外面	内面	胎土 A	B	C	D	E	F	焼成	色調外面 色調内面	部位 残存率	口径 底径	残存高 器厚	備考
1	甕	ヨコナデ	ヨコナデ	△	△				◎	良好	浅黄 7.5YR8/6 浅黄 7.5YR8/6	口縁部		2.6 0.8	内外面共に煤が付着
2	壷	ナデ	ナデ	△	○	△			△	普通	にぶい黄橙10YR7/4 にぶい黄橙10YR7/4	底部 1/4周	6	2.4 1.5	内面の摩滅が著しい
3	器台	ヨコナデ			△				○	不良	橙 5YR6/8 橙 5YR6/8	脚部		3.2 1.2	
4	高坏								△	普通	黄橙 10YR8/6 黄橙 10YR8/6	脚部		2 1.8	金雲母を僅かに含む
5	高坏				○			△	△	不良	橙 5YR6/6	脚部		2.4 1.5	内面の摩滅が著しい

胎土凡例　A 石英，B 長石，C 輝石，D 角閃石，E チャート，F 褐鉄鉱　　（単位はcm）



第20図　三宮遺跡土器実測図

4点とも管玉製作工程の角柱状剝片または側稜調整剝片と思われる。佐渡玉作遺跡に共通する新穂技法の第三工程に属すると思われるが、その工程の特徴である施溝に伴う擦切溝がいずれにも見られないことから、本遺跡における玉作が新穂技法にのっとって行われていたかをこれら4点から判断することは困難である。

・磨石（18）

I面全体に左上から右下方向への線条痕が多く見られ、II面の上部にも線条痕が見られる。ちょうど拳大の大きさで、古墳時代以降、場合によっては古代のものと考えられる。

・砥石（19）

砥面が2面で、長軸方向右側面に浅い線条痕が多く見られる。玉砥石とは形態を異にしており、古代のものと思われる。

4．土器の分析（第20図）

三宮遺跡で採集した土器は、土師器の破片12点である。今回の報告に当たっては、その内の5点を図示することにした。1は擬口縁甕の口縁部である。2は壺の底部であり、内面を観察すると、底部と胴部のつなぎめをナデているのが観察できる。3は器台の脚部で、「ハ」の字に開く。4は高坏の脚部で、一見透かし孔をもつようにみえるが、本来ここには坏部のほぞが充填されていたようである。5も高坏の脚部であり、坏部と連結する部分である。形態からすると、これらは全て、佐渡の弥生時代後期の土器である可能性が高いであろう。

5．小　結

以上、個々の遺物についてみてきたが、ここでそれらについてまとめてみよう。

今回私たちが調査の目的とした玉作関連資料に関しては管玉未製品4点が得られた。三宮遺跡ではこれまでにも玉作資料が採集されているが、これらに新穂技法が用いられているのかどうかを確認する必要があるだろう。

その他に得られた資料は、縄文時代から古代にかけてのものと思われる各種石器と、古墳時代前期に属すると考えられる土器であった。これらの中では、7の尖頭器状石器（ナイフ状石器）と10・11の「細石刃様のもの」が注目される。もしこれらが旧石器時代に遡るものであるならば、佐渡の歴史の始まりを語る上で、数少ない貴重な資料となるだろう。

（瀬川絵里・渡辺武文）

7）赤泊村柳沢遺跡

はじめに

柳沢遺跡は、佐渡郡赤泊村大字柳沢に存在する古代の製塩遺跡である。中位段丘を割って流出する柳沢川の海浜部にある小規模扇状地西側に立地する。

製塩とは、自然界から塩を栽塩し精製することを言うが、基本的には原始から古代にかけては土器を、中世以降は鉄釜を利用するという変遷をたどる(高橋1999)。古来より、塩と鉄は戦略的意義が大きかったようで、古代佐渡で生産される塩は、律令国家の東北侵略を支える物として、重要な意味をもっていたことが『日本紀略』の記述[5]からうかがえる。今回は、その塩を生産していた柳沢遺跡の表採資料に分析を加える。

1．研究略史

日本における土器製塩研究は、1953年に香川県香川郡直島町喜兵衛島遺跡群で、近藤義郎氏らの発掘調査団が製塩土器を発見したことに始まる(近藤1984)。以来、全国的に研究がなされるようになり、1994年には全国各地の土器製塩研究が集成された(1994近藤)。新潟県では、1957年に南佐渡の総合調査で製塩土器が発見され(本間1985)、その後、発見例の多さから、佐渡を中心に研究が進んだ[6]。1980年代には、開発に伴う大規模な発掘調査の増加により、新潟県の本州側（越後）でも製塩土器の発見が相次いだ。1969年の新潟市出山遺跡発掘調査をはじめとして、刈羽村刈羽大平遺跡、新潟市大藪遺跡、糸魚川市立ノ内遺跡などの発掘調査で資料が徐々に増加し、県内の製塩遺跡の集成もなされた（高橋1988a)。1988年には高橋保氏により県内の製塩土器の変遷が示され、時期的に2段階に分類された[7](高橋1988b)。坂井秀弥氏は古代手工業生産の観点から、律令国家政策に基づく須恵器・鉄・塩生産を論じ（坂井1989a)、更に律令期以降の塩生産の変容と、それに関連した新潟平野の地形環境や古代社会の変化を想定している(坂井1992)。1999年に高橋氏は、これまでの研究をまとめ、佐渡・粟島を含む新潟県内の製塩土器分布状態を明らかにし、佐渡の製塩土器については、8～10世紀の年代を与えている(高橋1999)。しかしながら、現在、製塩土器の年代・系譜・用途等の詳細は解明されておらず、佐渡および新潟県内の製塩土器全体を把握するには、資料の増加を待たねばならない状態である。

2．遺物の分析（第21図）

採集されたのは、製塩土器片多数、土師器片1点、須恵器片3点である。そのうち、製塩土器については、資料化が可能だったもの8点のみを分析対象とした。

1～4は製塩土器の口縁部である。外面にはほとんど調整がなされておらず、内面にわずかにナデの痕跡がみとめられる。2の口唇部に指頭圧痕が見られるが、口唇部には全体的にユビナデがなされているようである。5～7は製塩土器の底部である。5の外面には指頭圧痕が7の底部外面には管状の圧痕が各々見られる。1～7の形状から、おそらく器形は一般的な平底のバケツ形になると想定される。8は製塩土器の脚台（器台、支脚）の破片である。中空であることは確かだが、器形の復元までは至らない。

収集した製塩土器は、全体的に砂粒を多く含み、よく焼けているため、脆くて剝離しやすい状態であるが、特に底部と脚台に関しては剝離が著しく不明確な部分が多い。また、小破片であるため、復元径に不安を残す。

9は土師器の甕の口縁部から頸部にかけての破片である。内面はハケメの後、横方向のナデがなされ、外面は口唇部にユビナデの痕がみられるものの、それ以外の調整はなされていない。また製塩土器に比べ器壁が薄く、口縁部が「く」の字状に外反しているという特徴からも、この遺物はいわゆる佐渡型甕[8]であろう。

10は須恵器の有台坏の底部である。胎土に白色小粒子を多く含み精良であることから、小泊窯系のものであろう。左回転のロクロ成形の後、回転ヘラ切りを施し、高台を貼り付けている。高台は外端接地であり、端部に凹線状のくぼみをもつ。11は須恵器甑の体部片である。外面が格子の叩き目で、内面は同心円文の当て具の後ナデている。これも、叩き目や胎土からみて小泊系であろう。この遺物は甕である可能性もあるが、小泊窯跡群では内面の当て具痕をナデ消して調整している甕はほとんど見られない（坂井他1991）ことから、甑と考えたものである。

12は須恵器の瓶の肩部である。残存部分が少ないため器形の復元は難しいが、肩の張り具合からおそらく長頸瓶であろう。左回転のロクロ成形である。

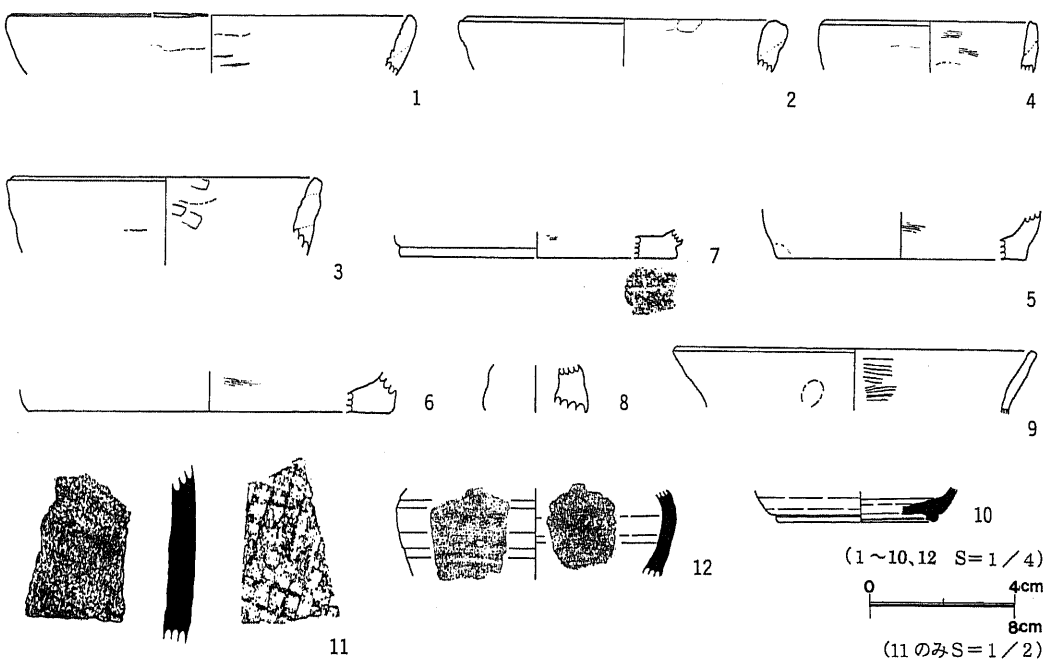
これらのうち、ある程度時期を推定できるのは、須恵器の有台坏である。この有台坏が小泊窯跡群産であるとして、年代を推定するために窯跡の特定を行ったところ、次のことが明らかになった。まず、小泊窯跡群の中で「高台が外端接地」で「高台端部に凹線状のくぼみを有する」という特徴をもつ有台坏が出土している窯は、カメ畑2号・3号窯跡に限られる[9]。更に有台坏を多く出土する窯はカメ畑2号窯である（春日1991）。従って10の有台坏はカメ畑2号窯跡で生産された可能性が高いといえる。

同様にして、11の須恵器甑を生産した窯跡の特定を行った。小泊窯跡群では、外面に格子又は平行叩き、内面に放射状又は同心円状の当て具痕を使用した須恵器が概して多いため、叩打原体からの窯跡の特定は不可能であった。しかし、甑が検出されたのは江ノ下窯跡のみである（坂井他1991）ため、11は江ノ下窯跡で製作された可能性を有する。尚、瓶についても窯跡の特定を試みたが、ほとんどすべての窯跡で瓶が出土しており、各窯跡間での瓶の形態差もあまりなかったため、窯跡を特定することはできなかった。

第17表　柳沢遺跡土器観察表

遺物No.	種別	器形	外面	内面	胎土 A	B	C	D	E	F	焼成	色調外面 色調内面	部位 残存率	口径 底径	残存高 器厚	備考
1	製塩土器		輪積み痕	ナデ	○	○			◎	◎	良好	淡赤橙 2.5YR7/4 灰白 5YR8/2	口縁部 1/20周	22	3.1 0.8	平底形の製塩土器か
2	〃			ユビナデ		○		△	○	◎	良好	橙 7.5YR7/6 橙 5YR6/6	口縁部 1/14周	約18	2.3 1.4	内面口縁部付近および口唇部に指頭圧痕
3	〃		輪積み痕	ナデ	△	○			◎	◎	良好	灰白 7.5YR8/2 にぶい橙 5YR8/2	口縁部 1/10周	16.9	4 1	平底形の製塩土器か
4	〃		輪積み痕	ナデ	△	○		△	◎	○	良好	赤褐 5YR4/6 赤褐 5YR4/8	口縁部 1/15周	約12	2.6 0.8	断面に輪積み痕がみられる
5	〃	平底形	ユビオサエ	ナデ	△	○	○		◎	△	良好	橙 5YR6/8 橙 5YR6/6	底部 1/10周	約14	1.2 1.5	断面に輪積み痕がみられる。外面底部付近にユビオサエ
6	〃	平底形		ハケメ		○			◎	○	良好	明赤褐 5YR5/8 明赤褐 2.5YR5/8	底部 1/20周	20以上	2.2 1.9	内面にわずかにハケメ
7	〃	平底形		ナデ？		△		△	◎	○	良好	明赤褐 5YR5/5 橙 5YR6/6	底部 1/17周	14.9	1.5 (底)1.2	底部に管状の圧痕
8	〃	脚台							○	○	良好	にぶい黄橙 10YR7/3 淡橙 5YR8/4	頸部？	不明	2.5 1.5	剥離が著しい。天地・径ともに不明確
9	土師器	甕	ユビオサエ	横ハケメ	◎	○		○	◎		良好	にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙 5YR7/4	口縁部 1/30周	20以上	3.1 0.4	佐渡型甕。口唇部内外面にユビナデ。外面頸部にユビオサエ
10	須恵器	有台坏	ロクロナデ	ロクロナデ	△	◎	△				堅緻	灰 10Y6/4	底部 1/7 周	8.2	1.7 0.4	ロクロ左回転。回転ヘラキリ後高台貼り付け。高台外端接地
11	〃	甕	格子叩き	同心円文当て具後ロクロナデ	△	◎				△	普通	黒褐 2.5YR3/1 灰 5Y4/1	胴部	不明	4.5 0.7	内面は同心円文の当て具の後、ロクロで調整し当て具痕を消す。甕である可能性もある
12	〃	瓶	ロクロナデ	ロクロナデ	△	○		○	○	△	堅緻	灰 N6/ 灰 7.5Y5/5	肩部 1/10周	12.2	4.6 0.7	ロクロ左回転。長頸瓶か

胎土凡例　A 石英，B 長石，C 輝石，D 角閃石，E チャート，F 褐鉄鉱　　（単位はcm）



第21図　柳沢遺跡土器実測図

有台坏・甑・瓶というこれら3種の須恵器の組み合わせが検出される窯跡は、江ノ下窯跡のみである。しかし、有台坏の形態はカメ畑窯跡のものと考えられることから、この3点の遺物は同時期のものではなさそうである。カメ畑窯跡の操業時期が9世紀第3四半世紀（川村2002）、江ノ下窯が10世紀第1四半世紀（春日1991、坂井1991など）であるとすると、柳沢遺跡は9世紀第3四半世紀～10世紀第1四半世紀頃に営まれたと想定される。

佐渡の製塩遺跡は一般に、8世紀～10世紀代に営まれたとされている（高橋1999）。また、新潟県内の製塩土器編年（坂井1994）では、平底・バケツ形の特徴をもつ製塩土器は第2段階に属し、9世紀後半～10世紀の年代が与えられている。更に、佐渡では平安期にはロクロ成形の土師器甕は皆無であり、すべて非ロクロ成形の佐渡型甕が使用されていたと考えられている（坂井1989b）。これらのことも、柳沢遺跡の年代に矛盾はなく、より確かなものにするといえるであろう。

3．小　結

以上、採集した遺物の紹介をするとともに、遺跡の年代の考察を行い、およそ9世紀第3四半世紀～10世紀第1四半世紀の時期に柳沢遺跡が営まれたと想定した。資料の制約から製塩土器についての考察までは至らなかったが、詳細な調査例の少ない佐渡の製塩遺跡に、ある程度有効な資料を提示することができたと思う。近年、佐渡の製塩遺跡は湮滅が進んでおり、特に外海府の方ではほとんど遺物が回収できない状況になっている。残っている遺跡の詳細な調査が早急になされ、製塩遺跡の資料が増えることを期待する。

（高橋明公子・田辺菜緒美）

まとめ

小木町長者ヶ平遺跡では、主に中期前葉から中葉にかけての土器小破片を紹介した。半截竹管による半隆起線文や連続爪形文を主とし、一部格子目文を施す北陸新保・新崎式土器とヘラ描き沈線文を主とする在地の藤塚式土器が主要なものである。中には信濃川中流域の王冠形土器ともみられるものを含む。既発掘資料中に火炎型土器・王冠形土器があり、その可能性はありうる。 同遺跡では、管見ながら過去に発見されていなかった縄文前期、黒浜式併行の土器（第2図1）が1点ではあるが確認された点は重視される。縄の特徴や繊維を含む点などから判断した。

また、同遺跡では、石鏃の各段階の製作工程品（「未製品」）と石核・剥片・砕片が大量に出土しており、石器製作の場であったことがうかがわれる。このうち、石鏃「未製品」はほとんどが失敗品であることが指摘された。石鏃の石材は玉髄47%、黒曜石29%、鉄石英12%、頁岩・チャート各6%と、地元石材の多用が目立つ。また、黒曜石の利用率が他に比して高い。黒曜石製石鏃のうち、透明度の高い霧ケ峰産と推定されるものは、剥片・砕片類が認められないことから製品というかたちで長者ヶ平遺跡に持ち込まれたものと判断される。あるいは、島外で製作され、製品として海を渡ったか、島内の他の遺跡で製作され、長者ヶ平遺跡にもたらされたと想定される。

搬入石材としては、他に同遺跡の蛇紋岩製の磨製石斧、滑石製の磨製石斧などがあげられる。三宮貝塚採集の翡翠製大珠の在り方などからも糸魚川・姫川流域などからの搬入が想定される。このうち、滑石製磨製石斧は未製品で、完成品（製品）としてではなく、原石というかたちで搬入されたのであろう。

なお、鉄石英製の細石刃様剥片を紹介したが、鉄石英を用いた細石刃は鹿児島県知覧町登立遺跡に類例がある。長者ヶ平遺跡では過去にナイフ形石器や有舌尖頭器が出土しており、細石刃の可能性も捨てきれないものの、確実ではない。

続いて、金井町堂ノ貝塚では、４号人骨共伴土器とされるものを紹介した。既報告記載の第13図のものと今回報告する深鉢３が口径・器高ともに数値が一致しないものの、底部に穿孔の可能性があることから埋甕として使用されていたものと考えられ、同一個体とみたい。土器は北陸新保・新崎式の系譜を引くものであるが、口縁部文様帯における隆帯の貼り付けなど趣の異なる部分もあり、一部佐渡で変容・在地化したものとみられる。

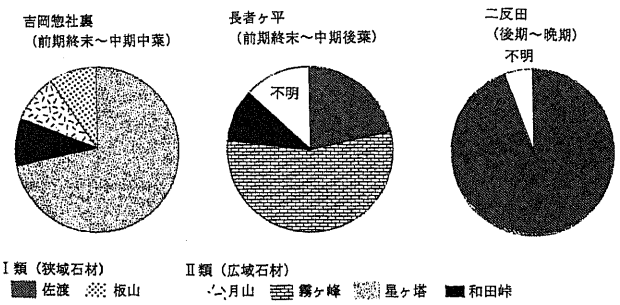
６号人骨に伴って発見されたイタチザメの歯利用の垂飾（土肥1982）は歯茎に３孔の穿孔があり、類例は南西諸島・沖縄に多い。このことから南西諸島出身者が海流に乗って漂着したか、あるいは佐渡島との遠隔地交易があった可能性もある。垂飾出土の６号人骨と他の人骨との形質的な違いの検討なども注目される。

また、６号人骨副葬の石鏃13本は、いずれも刃こぼれの無い未使用の石鏃で、副葬用に特別に誂えたものと推定される。一部の鉄石英を除く石材の多くは「蛋白石」とされるものである。いずれも島内産の石材を使用しているものと考えられる。ちなみに、この中に黒曜石製の石鏃が含まれない点は注目される。堂ノ貝塚での表面採集では島内産の黒曜石の剥片・砕片が認められる。

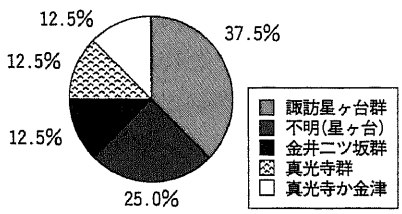
羽茂町番匠屋敷遺跡では、中期後葉から後期前葉の貝殻条痕文の粗製深鉢を多く認めた。また、第８図－８のような後期前葉の三十稲場式の蓋や、９のような特徴的な横位の刺突文をもつ三十稲場式の深鉢も発見した。このうち、蓋の橋状把手はＳ字状化し、新しい傾向がうかがえる。三十稲場式の古段階から新段階にかけてのものであろう。

一方、石器剥片と石器が大量に採集された。このうち石器素材は玉髄（瑪瑙）を主としており、石器４点、剥片42点、重量294.7g で総重量の65.7％を占める。続いて鉄石英が剥片11点、重量100.9g で、総重量の22.6％、さらに珪質頁岩が石器３点、剥片３点の重量19.7g で総重量の8.6％である。それに対して黒曜石は石器・剥片ともに１点の重量5.5g で先の長者ヶ平遺跡の在り方と大きく異なる。これは、遺跡の個性差かそれとも時期差を反映しているのであろうか。島内では黒曜石の原産地により近い番匠屋敷遺跡の方が逆に黒曜石の利用が少ないのである。

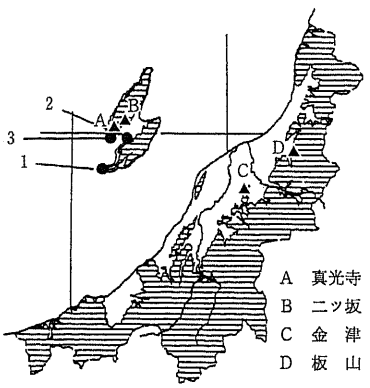
そこで、今回採集した黒曜石の産地同定を試みた。佐渡での黒曜石利用としては、小木半島南部の小木町長者ヶ平遺跡、真野湾奥部沿岸の真野町吉岡惣社裏遺跡、国仲平野の金井町二反田遺跡などで過去に分析が行われている（藁科他1988）。それによると、前期終末～中期中葉ないし後葉の同じ小木半島の遺跡で吉岡惣社裏遺跡では、星ヶ塔産が約４分の３、その他和田峠産、月山産、板山産がほぼ等量確認されている。一方、長者ヶ平遺跡で



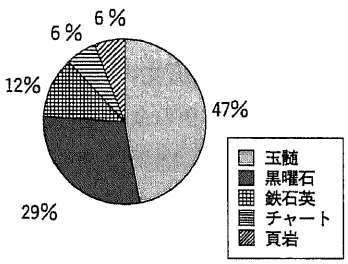
第22図　佐渡島内遺跡出土の黒曜石遺物の産地別使用比率
（藁科・東村1988を基に作図）



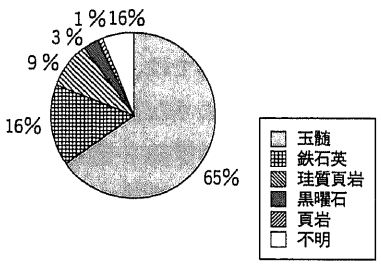
第23図　長者ヶ平遺跡出土の黒曜石遺物の産地別使用比率
（付編、小村2003を基に作図）



第24図　黒曜石産地と対象遺跡
1：長者ヶ平遺跡、2：吉岡惣社裏遺跡、
3：二反田遺跡



第25図　長者ヶ平遺跡出土石鏃の石材別使用比率



第26図　番匠屋敷遺跡出土石器石材の使用比率

は全く異なって霧ヶ峰産が半数以上、在地佐渡産が４分の１弱、その他和田峠産と不明産地がそれぞれ８分の１近くある。大局的には信州系の黒曜石が搬入されているという点で共通性があるが、地元産地のものの使用・未使用という点で違いがある。それは島内でも佐和田の産地に近いか否かの差とも考えられるが、遠隔地の島外からの供給を考えれば大した問題ではない。長者ヶ平遺跡の産地不明の黒曜石石材がどこから来ているかが問題である。

次に、二反田遺跡であるが、ほとんど90パーセントが在地の佐渡産ということで、在地産地に最も近接している事情によるものとも理解できる。あるいは時期的変化として、中

期から後・晩期にかけて黒曜石石材の需給に変化が起きたとも考えられる。そこで、対岸の越後側の角田山麓の状況を見てみると、前期末～中期前葉段階での諸遺跡で星ヶ塔産をはじめとする遠隔地のものが供給される一方で、中期前葉新段階から後・晩期には在地板山産の近距離からも黒曜石石材がもたらされるようになったことがうかがえる。ただし、後～晩期の巻町御井戸遺跡では九州の淀姫・北海道の赤井川など遠隔地の石材も見られる点は注意される。

今回の分析では、付編にあるように、長者ヶ平遺跡・番匠屋敷遺跡・堂ノ貝塚・三宮貝塚などから出土した黒曜石の分析から、長者ヶ平遺跡では信州、諏訪星ヶ台群のものを中心に、地元金井二ツ坂群、佐和田町真光寺群産のものが確認された。一方、番匠屋敷遺跡では諏訪星ヶ台群と金井二ツ坂群の可能性のあるものが認められた。堂ノ貝塚では地元、金井二ツ坂群の可能性のあるものが指摘された。三宮貝塚では新津の金津群というデータが出た。このことから、中期を中心とした拠点集落である長者ヶ平遺跡の遠距離交易がうかがえる。それに対し、後期前葉を中心とする番匠屋敷遺跡の場合は在地と遠隔地の両者が認められ、中期から晩期の三宮貝塚の場合、中距離交易がみられる。

畑野町三宮貝塚では、縄文中期前葉～晩期後葉までの長期にわたる土器を確認できた。中期中葉では金井町堂ノ貝塚や小木町長者ヶ平遺跡などに続いて馬高式の火炎土器関連の資料が得られた。第10図３は北陸系の縄文施文を持つもので、９も北陸系の中期中葉の土器である。10はキャリパー状の口縁部に剣先文を施す東北大木系の土器である。当遺跡でも中期後葉～後期前葉にかけては、いわゆる藤塚式の貝殻条痕文を有する粗製の深鉢が目立つ。後期では南関東からの影響が強く、堀之内式・加曽利Ｂ式・曽谷式の各型式の土器が見られる。特に、加曽利ＢⅠ式併行の土器は県内での確認例が稀少で注目される。晩期では、東北系の大洞BC式、Ｃ１式、Ｃ２式、Ａ式の各種土器が確認された。大洞Ｃ２式の第11図53の鉢に関しては、類例として緒立Ｂ遺跡出土例があげられる。ただし、口縁部文様帯が若干異なることが想定される。佐渡郡金井町二反田遺跡にも見られる粗製深鉢も出土している。

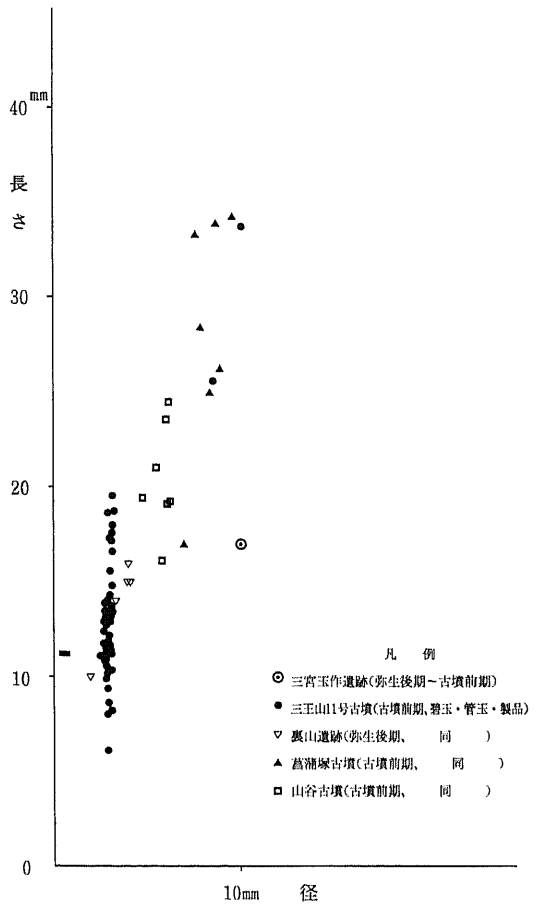
ところで、第12図72は弥生中期前葉の筒型土器とも考えられるものである。縄文後期の土器の可能性もあるが、同遺跡からは過去に磨り消し縄文の施文をもつ弥生中期前葉の筒型土器が出土している（計良・椎名1960）。ただし、「工」字状の文様を有するそれとは、文様構成を異にする点で気掛かりである。

両津市榎田遺跡では、後期前葉の三十稲場式古段階から南三十稲場式新段階の資料が得られた。両津湾に面する該期の数少ない例である。第13図３は橋状把手のしっかりしたもので三十稲場式の古段階に相当し、把手は４単位でなく２単位の可能性もある。第14図23は後期前葉のいわゆる藤塚式に相当すると考えられる波状口縁である。三十稲場式併行の第16図40は西の中津式あたりの影響が見られる鉢形土器である。沈線による逆Ｓ字状の横位の連続施文が特徴的である。41・42のような三十稲場式土器に特徴的な蓋形土器も認められる。特に前者と酷似する地文縄文の上にヘラ描き沈線文による蓋が巻町松郷屋遺跡で出土している。このような沈線文は新しい傾向とされる（前山1988）。

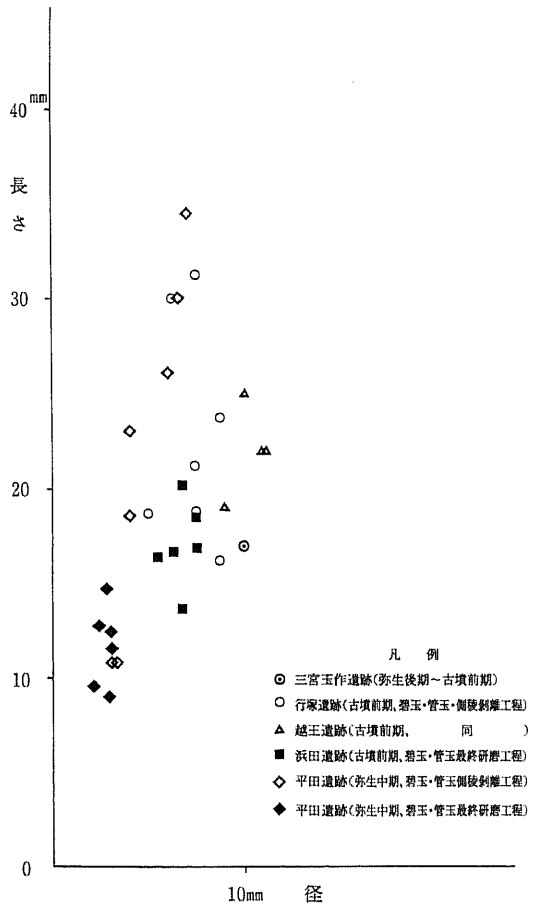
弥生玉作と考えられていた三宮玉作遺跡に関しては、採集資料からは積極的に弥生中期玉作を証明する資料は得られなかった。表採土器には弥生中期後半の土器と考えられるものは皆無で、管玉製作工程の角柱状剥片または側稜調整剥片の玉作未製品も弥生中期に特徴的ないわゆる新穂技法の擦り切り技法に伴う施溝の痕跡を留める資料は認められなかった。ちなみに、弥生後期後半の糸魚川市後生山遺跡の場合は、翡翠の分割に施溝が見られるが、碧玉管玉には施溝の技術は入っていない。また、三宮玉作遺跡では中期の穿孔具である石針やその未製品も発見できなかった。むしろ、土器の器種は加賀系の有段口縁の甕、大型高坏、小型器台等からなり、一方、口縁端部に面を持つ「く」の字状口縁のいわゆる「千種甕」も見られなかったので、これらは弥生時代後期の土器で、三宮玉作遺跡は弥生時代後期を主体とする玉作遺跡と推定されるようになった。立地的にも弥生中期と後期では異なる可能性がある。すなわち、弥生中期は低地に立地し、後期は低台地に立地しているとも考えられる。玉作の石材は、碧玉と鉄石英がある。管玉未製品では碧玉と鉄石英の比率が１：３であり、鉄石英があることから古墳時代のものとすることはできない。鉄石英は弥生中期段階に多用され、後期段階にも碧玉に対して客体的ながら使用されていることが佐渡新穂村蔵王遺跡で確認されている（小川1998)。なお、想定される製品の規格は、鉄石英製の管玉が長さ2.2～3.3cm、径７mm以下、碧玉製のそれが長さ1.7cm以下、径10mm以下である。

この数値と新潟県地域の弥生時代玉作遺跡出土管玉および同・前期古墳副葬品の管玉の大きさを比較してみよう。まず前期古墳副葬の碧玉管玉であるが、菖蒲塚古墳の場合、１点のみ長さ1.7cm前後のものを含むが、他は３～3.3cmと長く、三宮玉作遺跡のものと合致しない。一方、三条市三王山11号墳の場合、長さ2.5～3.4cm、径８～10mmの大型・太身の２点を除くと、長さ0.6～1.9cm、径３mm前後と短小で、三宮玉作遺跡例で想定される仕上がりの太さよりも細い可能性もあるものの、近似する。この三王山11号墳の小型・細身の一群は古墳出土管玉としては異例で、あるいは弥生時代の玉の伝製品の可能性が指摘されている（荒木1989、p156・161)。北陸地方の小型・細身の管玉に関しては、おおかた法仏II式～月影Ｉ式前後の弥生後期から終末期（古墳時代初期）の中でとらえられている（荒木1989)。

弥生玉作遺跡出土例では、後期の裏山遺跡例が完成品で長さ１～1.6cm、径３～５mmと、三宮玉作遺跡例に近い。一方、中期の佐渡平田遺跡では碧玉（緑色凝灰岩）製の完成品で長さ0.9～1.47cm、径2.1～３mmと、より細身である。また、鉄石英製では長さ1.27～1.48cm、太さ2.4～2.6mmと、前者とほぼ同規格である。それと比較すると、三宮玉作遺跡例の鉄石英製のものは側稜調整剥片段階のものであるが、長さ2.2～3.3cm、径７mm以下と長さが２倍近くある。もっとも、平田遺跡例でも側稜調整剥片段階では長さ3.65cm、径6.5mmのものを含む。よって、単純に両者に大きな差を認めるわけにはいかない。その他、中期の柏崎市下谷地遺跡の場合は、碧玉で長さ0.6～1.5cm、径２～３mmと短小、細身である。それに対し、古墳時代前期の同市行塚遺跡では完成品で長さ1.72cm、径4.2mm、研磨工程段階で長さ3.0cm、径11.3mm、側稜調整剥片段階から研磨工程段階にかけてで長さ1.54～2.88cm、



第27図　三宮玉作遺跡採集碧玉・管玉・未製品と関連資料(1)



第28図　三宮玉作遺跡採集碧玉・管玉・未製品と関連資料(2)

径5.0～11.3㎜と、長くかつ太くなる。同じく古墳時代前期、佐渡真野町浜田遺跡の碧玉製管玉では、最終研磨工程の未製品で長さ1.37～2.02cm、径5.5～7.5㎜となる。さらに、古墳時代前期とされる巻町越王遺跡の玉作未製品では、側面調整剝片段階の資料ながら、長さ1.9～2.5cm、径9～11㎜で、やや長く太い傾向がある。以上から、三宮玉作遺跡例は少なくとも古墳時代前期のものではなく、弥生後期のものとするのが妥当であろう。

なお、ここでも旧石器の可能性のある珪質頁岩製尖頭状石器（ナイフ状石器）と鉄石英製・碧玉製の細石刃様のものが認められたが、確実ではない。ちなみに、佐渡最古とされる小木町長者ヶ平遺跡出土杉久保型ナイフ形石器は、珪質頁岩製である。

赤泊村柳沢遺跡では、製塩関係の資料を紹介した。断片的な資料ではあるが、製塩土器8点、土師器1点、須恵器3点からなる。製塩土器は平底、バケツ形の形態を呈し、新潟県内製塩土器の第2段階に相当する。土師器は当該期の越後側と異なる非ロクロ成形の佐渡型甕である。須恵器は有台坏・甑・瓶の3種の器種が確認された。このうち、有台坏は高台部の形態的特徴よりカメ畑窯跡のものと想定し、9世紀第3四半世紀、一方3種の器種が揃う江ノ下窯の時期が10世紀第1四半世紀ということで、柳沢遺跡の操業期間を9世

紀第3四半世紀～10世紀第1四半世紀の間と結論付けた。土器片は1/10周以下の小破片で法量は当てにならないが、口径12～22cm、底径14～20cm、器厚8～19mmという数字は8世紀代のものと比して大きく、9世紀以降の新しい様相とすることができる。底部の断面形態は相川町送り崎遺跡や真野町背の沢古墳から出土したものに近い。佐渡では50箇所を超える製塩遺跡が確認されているが、多くは外海府から二見半島西海岸にかけてと小木半島の先端部から西海岸に集中している。当資料は、小木半島東海岸では数少ない製塩遺跡出土資料として資料的に貴重である。

おわりに

今後も、佐渡をフィールドにした教育・研究を継続していければ幸いである。調査・教育成果は、このようなかたちで活字にして発表するばかりでなく、新潟大学旭町学術資料展示室（愛称：あさひまち展示館）などを利用し、実物資料と併せて学外に公開していきたいと思う。また、ひいては地元、佐渡を会場にいつかそのような機会を設けるよう努力したい。

末筆ながら、調査に当たっては、山本　仁・羽生令吉・計良勝範・平　兵一、佐渡博物館・相川町教育委員会・相川町郷土資料館・小木考古資料館の各氏・各機関のお世話になった。また、報告に際して、甘粕　健・荒川隆史・加藤　学・北村　亮・澤田　敦・寺崎裕助・土肥　孝・土橋由理子・古澤妥史・前山精明・矢部英生・渡邊裕之、(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団、パレオ・ラボの各氏および各機関の協力を得た。記して深甚なる謝意を表したい。　（橋本博文）

〈引用・参考文献〉

阿部朝衛　2001「先史時代人の失敗と練習」『考古学雑誌』86-1 pp.1～26　考古学会

荒木勇次　1989「11号墳出土の玉類について」『保内三王山古墳群』pp.154～161　三条市教育委員会

池田晃一　1985「藤塚土器様式の研究　—とくに佐渡長者ヶ平遺跡を中心として—」『國學院大學考古学資料館紀要』第1輯　pp.16～53　國學院大學考古学資料館

小川忠明　1998「佐渡島の玉作りと蔵王遺跡」『図説　佐渡島歴史散歩』pp.23～27　河出書房新社

大川清・鈴木公雄・工楽善通　1996『日本土器事典』雄山閣

小木町教育委員会　1981『長者ヶ平遺跡』

小熊博史・立木宏明　1998「佐渡島における縄文時代草創期の遺物」『新潟考古』第9号　pp.133～149　新潟県考古学会

春日真実　1991「古代佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通」『新潟考古学談話会会報』8　pp.24～34　新潟考古学談話会

金井町教育委員会　1969『金井町貝塚遺跡緊急調査概要』

金井町教育委員会・佐渡考古歴史学会　1977『堂の貝塚』金井町文化財調査報告書第II集

川上賢吉　1928「雑報」『佐渡史苑』第3号　pp.65～67　佐渡史苑社
川村　尚　2002「佐渡郡羽茂町小泊窯跡」『新潟考古学会第14回大会研究発表要旨』pp.51～56　新潟考古学会
九学会連合佐渡調査委員会　1963『佐渡　自然・文化・社会』平凡社
清野謙次　1928「佐渡郡畑野村三宮神社境内貝塚の発掘」『日本石器時代人研究』pp.231～239　岡書院
計良由松・椎名仙卓　1960「佐渡三宮貝塚の弥生式土器」『佐渡博物館々報』第5号　p.28　佐渡博物館
小林達雄　1983「総論」『縄文文化の研究5　縄文土器III』pp.3～17　雄山閣
小林達雄　2002『縄文土器の研究』学生社
小林達雄・青木豊編　1983『長者ヶ平』小木町教育委員会
近藤義郎　1984『土器製塩の研究』青木書店
近藤義郎　1994『日本土器製塩研究』青木書店
齋藤秀平　1932　「三宮貝塚」『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯　pp.80～84　新潟県教育委員会
斎藤秀平　1937「新潟県に於ける石器時代遺跡調査報告」『新潟県史跡名勝天然記念物調査報告』第7輯　pp.1～120　新潟県教育委員会
坂井秀弥　1989a「越後・佐渡における古代手工業の展開」『北陸の古代手工業生産』pp.215～226　北陸古代手工業生産史研究会
坂井秀弥　1989b「第VII章－2　奈良・平安時代の土器」『山三賀II遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告第53集　pp.192～215　新潟県教育委員会ほか
坂井秀弥　1990「佐渡二見半島送り崎製塩遺跡の土器と炉状遺構」『新潟考古学談話会会報』5　pp.28～31　新潟考古学談話会
坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実　1991「佐渡の須恵器」『新潟考古』2　pp.26～67　新潟県考古学会
坂井秀弥　1992「新潟平野における古代塩生産の変容　－新潟市大藪遺跡をめぐって－」『新潟考古学談話会会報』10　pp.1～8　新潟考古学談話会
坂井秀弥・高橋　保　1994「IV－8　新潟県」『日本土器製塩研究』（前掲）pp.694～709
佐渡博物館　1963　『佐渡博物館研究報告』第4集
佐渡博物館　1960　『佐渡博物館研究報告』第5集
塩沢町教育委員会　1998『原遺跡』　塩沢町埋蔵文化財報告書　第18輯
鈴木俊成　1992「縄文時代の石鏃について」『新潟考古』3　pp.1～22　新潟県考古学会
清野謙次　1927　「佐渡紀行」『民族』2巻第5号　pp.89～103　民族発行所
清野謙次　1969　『日本貝塚の研究』　岩波書店
高橋　保　1988「新潟県における古代の土器製塩」『新潟考古学談話会会報』2　pp.16～19　新潟考古学談話会
高橋　保　1999「第4章4節4項　製塩」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編　pp.

345～348　高志書院
高橋　保　1988『糸魚川地区発掘調査報告書III 立ノ内遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第49集　新潟県教育委員会
田中耕作　1989「三十稲場式土器様式」『縄文土器大観』第4巻　pp.266～269　小学館
田中耕作・渡邊裕之　1999「第5項　後期」『新潟県の考古学』pp.105～116　高志書院
長者ヶ平遺跡発掘調査団　1981～1984『長者ヶ平遺跡』Ⅰ～Ⅳ　小木町教育委員会
土肥　孝　1982『縄文時代II（中期）』日本の美術　190　p.6　至文堂
戸沢充則編　1994『縄文時代研究事典』東京堂出版
鳥居龍蔵　1925　「佐渡ヶ島の有史以前」『有史以前の跡をたずねて』pp.72～76　雄山閣
土橋由理子　1999「第6節第1項黒曜石」『新潟県の考古学』高志書院　pp.179～184
土橋由理子　1998「新潟県における縄文時代の黒曜石利用について」『研究紀要』第2号　pp.43～70　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
鳥居龍蔵　1925「佐渡が島の有史以前」『有史以前の跡を尋ねて』pp.53～84　雄山閣
長岡市　1992『長岡市史』資料編1
中川成夫・本間嘉晴・椎名仙卓・岡本　勇・加藤晋平　1964　「考古学からみた佐渡」『佐渡　自然・文化・社会』pp.48～59　平凡社
新潟県教育委員会　1980『新潟県遺跡地図』
新潟県教育委員会　1991『城之腰遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第29集
新潟県考古学会編　1999『新潟県の考古学』高志書院
新潟県史編さん委員会　1993『新潟県史』資料編1原始・古代一遺跡編　新潟県
新潟大学医学部創立七五周年記念事業　期成会　1994「医学部解剖学第一教室」『新潟大学医学部七五年史』下巻　教室史　pp.1～9
畑野町史編纂委員会　1985　『畑野町史　信仰編』
畑野町史編纂委員会　1988　『畑野町史　総編　波多』
羽茂町　1989『通史編　古代中世の羽茂』2
藤田富士夫　1992『玉とヒスイ』p.113　同朋舎
本間嘉晴・椎名仙卓　1958「佐渡小木半島周辺の考古学調査」『南佐渡一南佐渡学術調査報告書一』新潟県文化財年報第二　pp.1～67　新潟県教育委員会
本間嘉晴・計良勝範　1988　「第2章　佐和田町の原始・古代」『佐和田町史』通史編Ⅰ　pp.347～543　佐和田町教育委員会
前山精明　1988「松郷屋遺跡」『巻町史』資料編1考古　pp.338～352
八幡一郎・椎名仙卓　1960「佐渡三宮貝塚調査報告」『越佐研究』第16集　pp.40～47　新潟県人文研究会
両津市史編さん委員会　1987　『両津市誌』上巻
藁科哲夫・東村武信　1988「佐渡島内遺跡出土の黒曜石遺物の石材産地分布」『佐渡考古歴史』会報12号　pp.1～5　佐渡考古歴史学会

〈註〉

1) 下小野式は五領ヶ台式併行に東関東で分布するとされたが、口縁部に文様を持つ例が少なく、器面全体を縄文施文された土器が中心であったことから、東関東五領ヶ台式の一部を構成するものと考えられ、大きく五領ヶ台式にまとめられている（大川他1996）。

2) 「海獣」歯牙製三孔垂飾は、イタチザメの歯製であると矢部英夫氏よりご教示頂いた。

3),4) 金井町教育委員会・佐渡考古歴史学会　1977　『堂の貝塚』　金井町文化財調査報告書第II集　p.18、p.20よりそれぞれ転載。

5) 延暦21（802）年正月条「越後国の米一万六百斛、佐渡の塩百二十斛を年ごとに出羽国雄勝城に送る。鎮兵の粮となす。」

6) 1963年の二見半島の総合調査や、相川町送り崎遺跡の発掘調査などが挙げられる。

7) 第1段階は、棒状尖底土器から平底に転換した時期で、およそ8世紀代にあたる。一方、第2段階は平底土器が継続するものの、法量的には口径50cm以上の大型のものから小型のものまであり、9～10世紀の年代が与えられている。

8) 非ロクロ成形の土師器で、体部が長胴ではなく球形をなす佐渡特有の甕である。外面は口縁部が無調整、体部が縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメ調整がなされる。口縁部が「く」の字状に外反し、器壁は薄く、砂粒を多く含むという特徴をもつ。その系譜は畿内にある（坂井1990）。

9) 「佐渡の須恵器」（坂井他1991）に掲載の須恵器と比較検討を行った。